

地域方言における変異形の併存状況： 同化や混交形に見られる単純化の方向

Regional Language Variation: Simplification, Accommodation, Assimilation, and Beyond

南 雅彦

Masahiko Minami

It has been said that non-standard dialects are increasingly losing their traditional forms and, under the pervasive influence of standard Japanese, they are evolving into modified versions (Sanada, 1990; Tokugawa & Sanada, 1991). This study, which is based on research conducted through a survey, focuses on Senshu-ben, a non-standard regional dialect in southern Osaka, Japan, in an attempt to discover if we can observe changes in younger generations' dialectal language use. Specifically, data on dialectical use of more than 300 high school students in the region were gathered; the participants were asked to fill out a questionnaire about their dialectal language use. The purpose of the research is two-fold: (1) reporting the most recent or current use of the Senshu dialect by young local generations in southern Osaka, and (2) analyzing the co-existing variants observed in the gathered data, especially the variation called the “neo-dialect,” which is strongly influenced by standard Japanese. The research particularly examined the non-standard variations of verb negation. It revealed that four major variants in verb negation — two types of verbal vowel assimilation (progressive assimilation and regressive or anticipatory assimilation), the neo-dialect (more precisely, the composite form), and traditional contractions — co-exist in the current language of high school students in the Senshu region (which is further divided into three sub-regions, Northern, Central, and Southern). As had been speculated, we found a tendency toward the proliferation of the neo-dialect throughout the region. Due to the current distribution of the neo-dialect and its simplified rules, we can speculate that such use will increase over time even beyond generational boundaries. Furthermore, we may be allowed to claim that neo-dialectal patterns observed in the current research indicate the direction of how the non-standard dialect will change over time.

キーワード：逆行同化、クレオール、コイナー、ジャーゴン、順行同化、スピーチ・アコモデーション（発話適応）理論、相補分布、単純化、日常の話し言葉、ネオ方言、ピジン、母音同化、類推

Key Words : Regressive assimilation, Creole, Koiné (common dialect), Jargon, Progressive assimilation, Speech accommodation theory, Complementary distribution, Simplification, Vernacular, Neo-dialect, Pidgin, Vowel assimilation, Analogy

1 はじめに

我々は誰もが時間の流れという連続体の中で生活しており、言葉の変化を意識せずにはいられない

い。しかも、言語体系には古い言葉と新しい言葉が変異形(バリエーション)として併存している場合が多々ある。さらに、単一の地域方言として一括りにされがちな言葉も地域内の市町村で大きく

異なる場合がある。いわゆる大阪弁も摂津方言、河内方言(摂津方言と河内方言が歴史的に同じ基盤の上に立つと考えるなら摂津・河内方言)そして和泉(泉南)方言に大別される。語彙などの方言の諸要素が文化的中心地を中心に同心円状に分布する場合、同心円の中心から周辺に向かって伝播した、つまり、外側のより古い形から内側のより新しい形へ順次変化してきたと推定する方言分布仮説である『方言圏論』(柳田 1930)もしくは波状説(wave theory)に従えば、摂津方言は大阪方言の中心的存在で言語の革新地としての役割を担っている。

一方、大阪府泉南地域の中心都市である岸和田市や岸和田市の南に隣接する貝塚市などで話される和泉方言(中泉方言)では「行くのか」と尋ねる場合、「イクンカ」や「イクンケ」など、古い言い方が現存している。「イクンカ」の「カ」は丁寧表現で『古事記』(712年)や『万葉集』(759年)の時代から、「イクンケ」の疑問の終助詞「ケ」は天保時代(1830-1844)から使用されている日常会話で親しみをこめた表現である。同様に、「そうでした」の丁寧表現は「ソーヤシテ」だが、これも歴史的に古い表現である。親しみをこめて「そうなんだよ」と言うばあも「ソーヤシ」と言う。朝の連続テレビ小説『カーネーション』(2011年度下半期NHK大阪放送局制作)は岸和田市が舞台だが、たとえば「～してやる」を意味する表現として「～チャル(チャール)」(例: しチャル・教えチャル)が誇張だと感じるくらい頻繁にドラマの台詞に登場するなど、岸和田ことばが再現されている。文法的特徴ばかりでなく、発音的特徴でも[se]の口蓋音[je](汗アシエ・背中シエナカ・店ミシエ)は江戸時代初期頃までは日本の標準的な発音([se]が方言)で、泉南地域ではこの西日本方言に伝統的な発音特徴が認められる。ところが、さらに南に位置し南和泉方言地域の阪南町や岬町では、こうした「せ」音の特徴は認められない。新たに言語形式・規則が発

生しても、その伝播は漸次的で、たとえ周辺地域で使用されるようになっても、中泉方言のような個性の強い方言を話す地域ではそうした伝播を受け入れない場合もある。

本研究では、大阪府南西部の泉州地域の高校2校に在学する高校生(若年層)を対象に行なった言語使用のアンケート調査結果の中から打消形式(「ヘン」「ン」などの否定辞)に着目しながら、(1)同化(assimilation)(2)標準語と方言の混交形(3)脱落形式、など変異形の併存状況を調査し、その背後にある合理化(単純化・省力化)の方向性を考察する。また、標準語と方言の混交形が今後、拡散・浸透していく可能性の有無、そうした混交形に認められる合理化の方向性、混交形そしてさらには共通語形が今後、拡散・浸透していく可能性の有無を探る。

2 言語・語彙変化の要因

2.1 単純化の方向: 順行同化・逆行同化・混交形

同化は、ある音素Xが、近接する音素Yの影響により、Yの特徴を共有したY'(異音Y')として実現する音韻過程を指すが、順行同化(progressive assimilation)と逆行同化(regressive assimilation)に二分される。伝統的な京都方言では順行同化という形でイ段へのシフト・母音調和が起こる。これに対して、伝統的な大阪方言では逆行同化(エ段へのシフト現象・母音調和)が顕著である。だから、「せっかく誘たのに、あの子けえへんかったわ(来なかった)」「今日は雨ふってるから、学校いけへん(行かない)」などと言う。「よく味がしみています」ということを、大阪弁では「よう味がしゅんでる」と言う。具体的には、「この高野豆腐(おでん)よお味がしゅんで、うまいなあ」などとなる。「しゅんでる」は「しみてる・しみこんでる」という意味だが、『だしパックしゅんでる』という名前の商品すら販売されている。辞書では「染む」

(古語)は『[自マ四]([しむ(染)]の変化)「染まる。においや香が染みつく」「染める。においや香が染みつく』とあるが、万葉集では「染む」が出てくる和歌は20首余りあり、近畿では古くから使用されている言葉である。この[ʃi-mu]の前の母音、[i]が後続母音[u]と同化することで[ʃu-mu]と母音同化(vowel assimilation)、つまり逆行同化が起こる。「歯がシミるのを防ぐシュミテクト」として日本では第一位のシェアを占めている歯磨剤『シュミテクト』は、日本以外では『Sensodyne(センソダイン)』のブランド名で販売されているが、これも日本販売元の製薬会社の本社が大阪なので、こうした名称(シュム+プロテクト)になったことは容易に推測できる。

同様に、「かまう」の否定形は「かまわない(構わない)」だが、京都方言では関西方言否定形「へん」を付けて「カマヘン」となる。ところが、大阪では逆行同化を起し「カメヘン」と言う場合もある。つまり、[kama-hen]が母音同化を起こして[kamehen]となるのである。京都方言では(語幹が子音で終わるモーラを避けるためア音が挿入される)ア音接続するので「書かへん(kaka-hen)」だが、大阪方言では母音同化という現象が顕著なので逆行同化を起し「書けへん(kake-hen)」となる。母音調和による発音労力の軽減化(単純化・省力化)としての同化は方言に限ったものでもなく、また日本語に限ったものでもなく、他の言語、たとえば、英語でも起こる。

(1) 順行同化：同化の環境を構成するYがXに先行する場合 /...YX.../→[...YY' ...]

キーヒン(来ない)/kiya+**hen**/→/ki:**hen**/→[ki:hin]

オキヒン(起きない)/oki+**hen**/→[okihin]

死んだ/ʃin+**ta**/→[ʃinda](語幹が有声音)

liked/laik+**d**/→[laikt](語幹が無声音)

(2) 逆行同化：同化の環境を構成するYがXに後続する場合 /...XY.../→[...Y' Y...]

ケーヘン(来ない)/kiya+**hen**/→[kie+**hen**]→[ke:hen]

イケヘン(行かない)/ika+**hen**/→[ike**hen**]

カケヘン(書かない)/kaka+**hen**/→[kake**hen**]

カメヘン(構わない)/kama+**hen**/→[kame**hen**]

シュム(染む)/ʃi+**mu**/→[ʃumu]

買った/kaw+**ta**/→[katta]

語幹の最後の母音(尾母音)と後接する否定表現内の母音がどちらも[i]で一致する場合をイ段同化、語幹の尾母音と後接する否定表現内の母音がどちらも[e]で一致する場合をエ段同化と呼ぶことにする。イ段順行同化が起こりやすい京都方言(や大阪府北部ならびに河内地域)では「できない」は「デキヒン」となり、エ段逆行同化が起こりやすい大阪方言(おもに大阪府南部)では「デケヘン」となるが、本来、複雑であった言語体系、ここでは音韻体系の合理化・単純化と解釈できよう。こうした言語内要因で合理化・単純化が起こる例としては「起きれる」「食べれる」などのラ抜きも同様である。

2. 2 単純化の方向：混交形(標準語+方言)

実際には、「デキヒン」「デケヘン」以外に「デキヘン」という表現も耳にする。これは標準語(共通語)「デキナイ」の否定形部分(打消の助動詞)「ナイ」を近畿(関西)方言否定形「へん」で置き換えた混交形で、共通語化の結果だと捉えられる。順行同化や逆行同化と異なり、混交形は音韻調和がないため音韻的側面からは単純化とは言えない。しかし、共通語の影響を受けた混交形は、統語的側面の文法規則としては既存の形式の合理化・単純化だと考えられる。

(3) 混交形：標準語＋方言[注：近畿方言の特徴
で一音節が長めに発音される場合あり]

コーヘン(来ない) (標準語)/ko/
＋(方言否定形)/hen/ →[ko:hen]
イカヘン(行かない) (標準語)/ika/
＋(方言否定形)/hen/ →[ikahen]

表1は逆行同化、順行同化、混交形の対照表である。「読まない」のイ段順行同化欄に斜線が入っているが、五段動詞ではイ段同化は起こらず、代わりにア音接続が起こるからである。ア音接続(yoma-hen)のため混交形(yoma-nai → yoma-hen)との区別がつかない。

マスメディアを通じて全国に流れる共通語の影響により共通語が広がる一方で、伝統的な方言が衰退し、結果として地域の若年層のスピーチスタイルが大きく変容しつつある(国立国語研究所2003)と言われる。混交形は、そうした表象であり、共通語に置き換えるのではなく、従来の方言スタイルと標準語を混合させた中間的なスピーチスタイル(話し言葉)が一般的になりつつある(真田 2006)と捉えられよう。たとえば、岡田彰布氏(1957年11月25日生 -)の新聞記事を眺めてみよう。氏は大阪市東区(現・中央区)出身で、早稲田大学野球部を経て、阪神タイガース、オリックス・ブルーウェーブ(現在のオリックス・バファローズ)両・在阪球団でプレーし、現役引退後は両球団で監督を務めたが、氏の大阪弁の発言は、しばしばスポーツ紙面ににぎわした。以下に示す例(4)では、最初の「デキヒン」は京都方言や大阪府北部で認められる順行同化、次の「デキヘン」は

混交形である。執筆者の先入観もあるので断定はできないが、岡田氏が実際にこのように発音したと仮定すると、前者の「デキヒン」は伝統的な京都方言である。摂津地域は京都府と隣接し、岡田氏の出身地である大阪市内は革新の中心である摂津方言地域なので何ら不思議ではない。例(4)後者の「デキヘン」なら、たとえば、岡田氏の年齢、学生時代は東京在住であったこと、東京に遠征に行くことも多いなど、さまざまな理由で標準語の影響を受けていると考えられる。

- (4) デキヒン vs. デキヘン：新聞記事の見出しから『岡田オリ5連敗「野球できひん。ヨーイドンで終わってしまうもん」』(デイリースポーツ 2010年4月8日)『オリ・岡田監督、バッテリーに苦言「簡単なことが全然できへん」』(スポーツナビ 2011年9月10日)

真田(1987, 2001)は本稿で述べるような混交形をネオ方言(neo-dialect)と呼び、方言と標準語が接触することによって生じた新たな混交体系と規定している。ネオ方言は、同じ地域の老年層や、標準語を用いる若年層のどちらでもない「自分達の言葉」として意識的に活用することで、言語アイデンティティを創造している。マスコミもそうした表現を敏感(もしくは過敏)に捉えているのではないだろうか。『「立ちションできへんくなる」国民栄誉賞を辞退した、世界の福本伝説』(日刊SPA 2013年4月3日)という見出しの記事がある。岡田氏同様、福本豊氏(1947年11月7日生 -)も

表1 逆行同化・順行同化・混交形の対照表

標準語形	読ま	ない	起き	ない	でき	ない	来	ない
エ段逆行同化	ヨメ	ヘン	オケ	ヘン	デケ	ヘン	ケー	ヘン
イ段順行同化	/		オキ	ヒン	デキ	ヒン	キー	ヒン
混交形	ヨマ	ヘン	オキ	ヘン	デキ	ヘン	コー	ヘン

大阪市生野区出身で東大阪市(図1参照)育ちの元プロ野球選手である。氏は1983年当時の世界記録となる939盗塁を達成し、中曽根康弘内閣から国民栄誉賞を打診されたが辞退している。この記事の中では「そんなんもろたら立ちションもできんようになる」と「デキン」という脱落形を使用している。国民栄誉賞辞退の福本伝説のスレッドの書き込みには「できへんくなるって、おっさんでも使うで」という反応がないではないが、総じて「デキヘン+クナル」という表現に違和感が抑えきれないらしく、「なに?この関西弁。福本がこんな言葉使うかドアホ!胸くそ悪うて反吐出てくるわボケ!」と過激な批判から「福本世代は『できへん』普通に言うし、今、潰滅しつつあるのは『できひん』と順行同化まで引き合いに出す例、さらには『できへん』は言うけど、その後の『くなる』ってケツタイな言い回しを福本は使わん」と言語分析を行なった書き込みまでである。

また、「近年、若い関西人のあいだには『見えへんくなる』という表現が広まっているように思いませんか?」と問いかける書き込みも存在する。「くなる」は「楽しくなる・寂しくなる」のように形容詞に付加して用いられるが、それを形容詞以外にも一般化したと考えられ、類推(analogy)を使った単純化が見られる。

(5) 若年層の表現と従来の関西方言(大阪方言)の対比
行かなくてもいい

若年層:行かんくてもええ

従来の関西方言:行かへんでもええ・行かんでもええ

行かなくなる

若年層:行かんくなる

従来の関西方言:行かへんようになる・行かんようになる

関西方言の変化に限ったことではなく、若年層

では共通語「なく」と「ん」(脱落形)の混交形「んく」が広まりつつある。関西地域ではない他のスレッドでは「ロッセとオリックスと楽天が今年から」スポーツからFOXスポーツジャパンに移籍して観れなくなったのが悲しい」といった書き込みも認められる。このように、人はできる限り整然とした体系を追求し、単純な形を効率的に頭の中に蓄積しようとする。

2.3 スピーチ・アコモデーション(発話適応)理論

大阪方言は共通語などの影響を受けて、年々伝統的な形を失いつつあり、標準語の影響を受けた形、つまり混交形へと変容している(真田 1990; 真田・岸江 1990)。前述したネオ方言とはほぼ同義で徳川・真田(1991:107)は「現在あるいは近い過去に出現し、定着に向かってる形式」を「新方言」と規定している。しかし、こうした変化は一方通行ではない。これは、Gilesら(Giles, Coupland, & Coupland, 1991; Giles & Powesland, 1975)の応化理論(accommodation theory)[スピーチ・アコモデーション(発話適応)理論(speech accommodation theory)]からも理解できよう。発話適応理論は、端的に言えば「対話相手に合わせてものを言う」(橋内 1999)ことである。だが、心理的収束・収斂と言語的収束・収斂が同時に起こるとは必ずしも断定できない。心理的拡散・分離と言語的拡散・分離が同時に起こっている場合もあるだろうし、心理的収束・収斂が働いていても言語的拡散・分離が起こっている可能性も考えられる。あるいは逆に、心理的には拡散・分離しているのに言語的収束・収斂が起こっている場合もあり得る。

さらに、方言独特の表現には帰属意識や他集団との差異化を表す機能などがある。ハンバーガーショップの『マクドナルド』の略し方を例にとりて考えてみよう。東日本(関東地方)では「マック」だが、西日本(関西地方)では「マクド」と言い語尾の

「ド」にアクセントを置く。日本経済新聞(大阪夕刊いまだキ関西大阪経済部 神宮佳江記者2012年1月25日)の『マクドナルド、関西ではなぜ「マクド」?』と題した記事では、関西でも若年層を中心に共通語としての「マック」を自然に使う人が増えているのではないかという予測に対して、まだまだマクド派勢力が強いということをインタビュー調査している。とりわけ、以下に示す(6)の最後の意見は「同音衝突」という観点から興味深い。同音衝突とは「理解の不便さなどから同音語の共存が許されず、片方の語が形を変える現象を指す。これが地理的平面の上では、二つの同音語が地域を分け合い、互いを侵さない分布となって現れる」(小林 2006:125)現象を示す。マッキントッシュ・コンピュータの意味で「マック」を使用している関西地域では、同音異義語として新しくマクドナルド・ハンバーガーの略称「マック」が入ってきても同音衝突となり敬遠され、広がらない。結果的に、マクドナルド・ハンバーガーの意味で「マクド」を使用する地域はそのまま残り、地図の分布を見てもマクドナルド・ハンバーガーという意味で「マック」を使用する地域とは重なり合わない「相補分布(complementary distribution)」になるというのである。

- (6) なぜマクドなのか：日本経済新聞(2012年1月25日)から
堺市に住む40代のビジネスマンは「高校ぐらいからやったかなあ。ずっと『マクド』言うてますけど」という。孫のためにハンバーガーを買いに来たという大阪市内在住の70代の女性も「うちでは孫も私も『マクド』やわ」とほほ笑む。
兵庫県西宮市で育ったという40代の主婦も高校時代からのマクド派。米アップル社のパソコン「マッキントッシュ」が「マック」の愛称で呼ばれていることにも触れ、「『マクドナル

ド』まで『マック』言うたら紛らわしいし、『マクド』でええんちゃう?」とあっけらかんと話す。

要約すると、自立的な言語変化の動機には、言語の「経済性」と「創造性」という2つの相反する方向の力がある。経済性に基づく言語変化の場合、音声面では発音負担をより軽減化する方向への変化が促される。発音負担の軽減化としては、順行同化や逆行同化に認められる母音調和が挙げられるが、こうした変化は言語内の要因によるもので整合性のあるものへと向かう単純化である。さらに、文法面ではより記憶負担を軽減化する単純な規則を整える方向に、人は考えようとする。こうした変化には標準語と方言の混交形のような共通語化があるが、一方、言語外的要因による場合も考えられる。

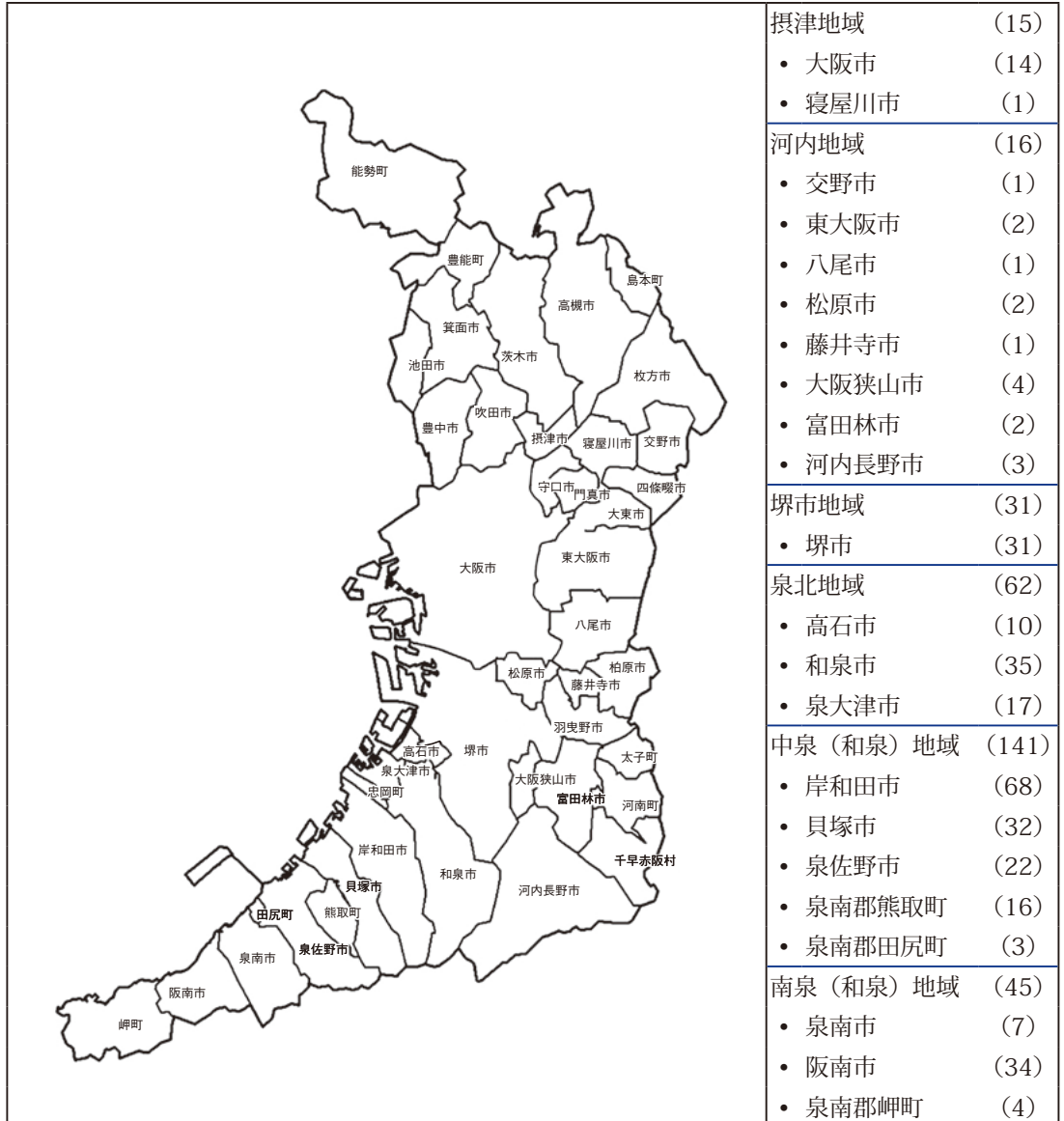
3 方言調査

3.1 調査方法とインフォーマント

本調査の目的は大阪府在住の若年層の言語使用の様相を探る、とりわけ、共通語(標準語)の影響からなる混交形そして(混交形という変異のさらに先にあるものとしての)共通語形がどの程度、浸透・拡散しているかを検証することである。大阪府在住で泉州地域の高校(大阪府第4学区公立高校1校、私立高校1校)に在学中の高校生(16~18歳)310名を対象に、日常的に使用する語彙や動詞の活用方法など合計60問からなるアンケートを2010年に実施した。[注：60問のうち、本研究に関する質問項目は付録を参照されたい。動詞に関する質問が本稿に述べる順序で一括りに尋ねたものでないことに留意されたい。]回答方法は4択か自己記入で「親しい友人と話す時の言い方」をひらがな記入してもらった。これは、複数の変異形の中で最も使用頻度が高く、意識して使用するので

はない日常の話し言葉(vernacular)が混交形、さ めである。
 には共通語形へとシフトしているのかを探るた インフォーマントの在籍する2校だが、公立と

図1 大阪府市町村地図とインフォーマント数(括弧内)



[注:河内地方は南北に広く、京都府・奈良県と隣接する地域がある。交野市は北河内方言地域、東大阪市・八尾市は中河内方言地域、松原市・藤井寺市・大阪狭山市・富田林市・河内長野市は南河内方言地域に下位区分が可能である。しかし、本調査の主目的は河内方言ではなく、また、これらの地域のインフォーマント数も少ないので河内方言地域という括りを用いた。寝屋川市は河内地域だが、ここでは岸江(2009)に従い、摂津方言地域に含めた。]

私立の違いはあれ、両校とも大学への進学率が非常に高く、そうした意味では学校間格差は存在しない。公立高校には学区があるが、私立高校には学区がなく大阪府ほぼ全域からの通学が認められる。ただし、本調査では豊能地域(豊中市・池田市・箕面市)や三島地域(吹田市・高槻市・茨木市・摂津市)など北摂地域からの通学者はおらず、摂津方言話者としての扱いは大阪市内と寝屋川市からの通学者である。[注:寝屋川市からの通学者1名は中河内方言地域に含めることも可能だが、本調査では岸江(2009)に従い、摂津方言地域に含めることにした。]

泉北方言は泉南諸方言に近いというより、むしろ摂津・河内の諸方言に近いと言われている。岸江(2009)では、摂津方言・河内方言・(高石市・泉大津市・和泉市で使用される)泉北方言をグループとする「摂津・河内方言」と「泉南方言」に大別することが可能だという立場を取り、さらに「泉南方言」は中泉(中和泉)方言と南泉(南和泉)方言の2方言に下位分類している。本調査では、細分化した調査を行なう目的で「摂津方言」「河内方言」「堺市地域方言」「泉北方言」「中泉方言」「南泉方言」の6地域に分類することにした。堺市地域は摂津方言と河内方言が重なり合う地域なので、別個の扱いとしたが、いわゆる堺弁は船場ことばの土台となった方言であり、おおまかには摂津・河内方言地域に含まれる。同様に和泉(泉南)方言の下位区分である「中泉方言」と「南泉方言」を別個の地域として扱った。これは調査対象の公立高校が岸和田市に位置し、インフォーマントの2割強が岸和田市在住であること、そして岸和田ことばに代表される中泉方言が個性の強い「一般的に知られている大阪弁とはかなりかけ離れた方言」(岸江2009:1)だと考えられることによる。

3. 2 調査目的

本調査では、動詞の否定表現(現在形・過去形)に焦点を当て、どのような語形が使用されているのか、変異形 — イ段順行同化(イ音接続)・エ段逆行同化(エ音接続)・ア音接続・混交形・脱落形式・共通語形 — の分布を以下の観点から調査した。

1. 動詞の種類による相違[言語的要因]

大阪府在住若年層によるイ段同化(順行同化/イ音接続)・エ段同化(逆行同化/エ音接続)・ア音接続・混交形・脱落形・共通語形などの変異形の浸透度(使用頻度)は、動詞の種類(変格活用・一段活用・五段活用動詞)と関わりがあるのか。

2. 地域(大阪府方言区分)による相違[地域・社会的要因]

大阪府在住若年層によるイ段同化(順行同化/イ音接続)・エ段同化(逆行同化/エ音接続)・ア音接続・混交形・脱落形・共通語形などの変異形の使用は、出身地域によってその浸透度(使用頻度)が異なるのか。

表2は本調査の打消形式(動詞+否定辞)の変異形を示したものである。たとえば、五段動詞「行く」の否定形「行かない」では、ア音+「ヘン」で「イカヘン」(ika-hen ア音接続:主に京都方言)となる。ただし、この場合、混交形の「イカヘン」と区別がつかない。ここでは議論を簡略にするため、エ段同化を伝統的な大阪方言、イ段同化を伝統的な京都方言と捉えることにするが、京都方言では「イケヘン」は[不可能]を意味する。さらに、脱落形の「イケン」は大阪方言でも[不可能]を意味するので、表2では脱落形を「イカン」のみとした。五段動詞「かまう(構う)」の否定形は「かまわない(構わない)」だが、伝統的な大阪方言ではエ音接続・逆行同化を起こし「カメヘン(kame-hen)」、京都方言ではア音接続して「カマヘン(kama-hen)」だが、混交形は「カマワヘン」(kamawa-nai →

kamawa-hen)になると予測される。

脱落形「ン」は、「ヘン」と同様に否定辞のひとつだが、伝統的な大阪方言では変異形「イカナンダ」「シラナンダ」などの「～ナンダ」も用いられていた。真田ら(2009)の調査時(1990年)の70歳以上のインフォーマントに「行かなかった」について調査した言語地図では、「～ナンダ」系と「～カッタ」系(例:「イカヘンカッタ」「イケヘンカッタ」)の2形式の併存状態が示されている。真田らは、「～ナンダ」系は主に老年層でよく使用される傾向があるのに対し、「～カッタ」系は若年層で使用されることを指摘し、今後、大阪府全域で「～ナンダ」系

が後退・衰退し「～カッタ」系がこれに取って代わるであろうと予測している。本調査は若年層を対象としているので、こうした先行調査の予測通りなのかどうかを検証することを目的としている。

否定辞「ヘン」は、「ン」の強調表現「連用形+ハセン」が幕末から明治にかけて以下に示す歴史的变化によるというのが定説である。特に明治以後は「ヘン」が急速に普及し、強調の意が薄れ(かつて頻繁に使用された)「ヤヘン」は現在「ヘン」に集約されつつある(例:出来ヤヘン→デキヘン)。語幹が1拍の動詞の場合は、「ヤ」を省略する代わりに連用形を長音化する(例:見ヤヘン→ミーヘン)

表2 否定辞の変異形

動詞	イ段同化	ア音接続	エ段同化	混交形	脱落
「来ない」 (カ変・不規則)	キーヒン [ki:hin]	×	ケーヘン [ke:hen]	コーヘン [ko:hen]	コン [ko-n]
「しない」 (サ変・不規則)	シーヒン [ʃi:hin]	×	セーヘン [se:hen]	シーヘン [ʃi:hen]	セン [se-n]
「出来ない」 (上一段・母音)	デキヒン [dekihin]	×	デケヘン [dekehen]	デキヘン [dekihen]	デキン [deki-n]
「見ない」 (上一段・母音)	ミーヒン [mi:hin]	×	メーヘン [me:hen]	ミーヘン [mi:hen]	ミン [mi-n]
「起きない」 (上一段・母音)	オキヒン [okihin]	×	オケヘン [okehen]	オキヘン [okihen]	オキン [oki-n]
「行かない」 (五段・子音)	× ₁	イカヘン [ika-hen]	イケヘン [ike-hen]	イカヘン [ika-hen]	イカン [ika-n]
「構わない」 (五段・子音)	× ₂	カマヘン [kama-hen]	カメヘン [kame-hen]	カマワヘン [kamawa-hen]	カマワン [kamawa-n]
「行かなかった」 (五段・子音)	× ₃	イカヘンカッタ [ika-hen-katta]	イケヘンカッタ [ike-hen-katta]	イカヘンカッタ [ika-hen-katta]	イカンカッタ [ika-n-katta]
「知らなかった」 (五段・子音)	× ₄	シラヘンカッタ [sira-hen-katta]	シレヘンカッタ [sire-hen-katta]	シラヘンカッタ [sira-hen-katta]	シランカッタ [sira-n-katta]

[注: ×₁ ×₂「行かない」「構わない」「知らない」(表2では過去形を表示)のような五段動詞ではア音接続して「イカヘン」「カマヘン」「シラヘン」となる。]

[注: ×₃ ×₄過去形では「イカナンダ」「シラナンダ」の老年層で使用される「～ナンダ」系の形式を調査した。]

[母音調和せず]。脱落の「ン」は「ヘン」と同じ、つまり、文語助動詞「ズ」連体形から派生した「ヌ」がさらに転じたものである。脱落(未然形+「ン」)は中世以来の西日本共通の表現だが、近畿中央部では明治以降「ヘン」が普及したため、「ン」が用いられる場面は、強く言い切る場合や慣用表現(「んで・んでも」や「んと」)のような助詞を伴った用法など、やや限定的なものとなっている(西尾2009)。

(6) 関西方言否定辞「ヘン」の歴史的変化

カ変：来ハセヌ→来ハセン→来ヤセン・来ヤヘン
→来ヤセン・来ヤヘン→来エヘン(エ段同化 ケーヘン：イ段同化 キーヒン)

サ変：シハセヌ→シハセン→シヤセン・シヤヘン
→シヤセン・シヤヘン→シエヘン(エ段同化 セーヘン：イ段同化 シーヒン)

一段：出来ハセヌ→出来ハセン→出来ヤセン・出来ヤヘン
→出来ヤセン・出来ヤヘン→出来エヘン(エ段同化 デケヘン：イ段同化 デキヒン)

一段：見ハセヌ→見ハセン→見ヤセン・見ヤヘン
→見ヤセン・見ヤヘン→見エヘン(エ段同化 メーヘン：イ段同化 ミーヒン)

一段：起きハセヌ→起きハセン→起きヤセン・起きヤヘン
→起きヤセン・起きヤヘン→起きエヘン(エ段同化 オケヘン：イ段同化 オキヒン)

五段：行きハセヌ→行きハセン→行きヤセン・行きヤヘン
→行きヤセン・行きヤヘン→行きエヘン(エ段同化・エ音接続 イケヘン：ア音接続 イカヘン)

五段：構いハセヌ→構いハセン→構いヤセン・構いヤヘン
→構いヤセン・構いヤヘン→構いエヘン(エ段同化・エ音接続 カメヘン：ア音接続 カマヘン)

同様に、脱落「ン」は西日本で古くから専ら使用されてきた形式で、「ナイ」を使う東日本に対して典型的な東西分布を反映している。「ン」の流れを簡略化すれば「セズ(se-zu)→セヌ(se-nu)→セン(se-n)」「デキズ(deki-zu)→デキヌ(deki-nu)→デキン(deki-n)」「ミズ(mi-zu)→ミヌ(mi-nu)→ミン(mi-n)」「イカズ(ika-zu)→イカヌ(ika-nu)→イカン(ika-n)」などとなるのが通説である。岸江(2005)は「ン」に代わって登場した「ヘン」が近畿一円を席卷しつつあると指摘する。ただし、個人の認知レベルもしくは地域レベルでは否定辞「ヘン」の歴史的変化から派生した「シヤン」「デキヤン」「ミヤン」も存在する可能性があるのではないだろうか。

4 方言調査結果：変異形の分布(動詞別)

4.1 「来ない」

(カ変・不規則動詞)変異形の分布

カ行変格活用では、以下の打消表現に焦点を絞って分布を示す。

キーヒン	[ki:hin]	イ段順行同化
ケーヘン	[ke:hen]	エ段逆行同化
コーヘン	[ko:hen]	混交形
コン	[ko-n]	脱落
コナイ	[ko-nai]	共通語形

まず、変異形では「ケーヘン」(エ段同化)と「コーヘン」(混交形)が2大勢力であった。標準語形「コナイ」と伝統的な大阪方言「ケーヘン」が混交して形成された「コーヘン」は全域平均で43%を占めていた(河内地域では60.0%、摂津地域では56.3%、堺市地域、泉北地域、南泉地域でも40%以上、ただし中泉地域では17.0%)。これに対して、伝統的な大阪方言「ケーヘン」は全域平均34%だったが、岸和田市を中心とする中泉地域では56.7%と突出した占有率であった。

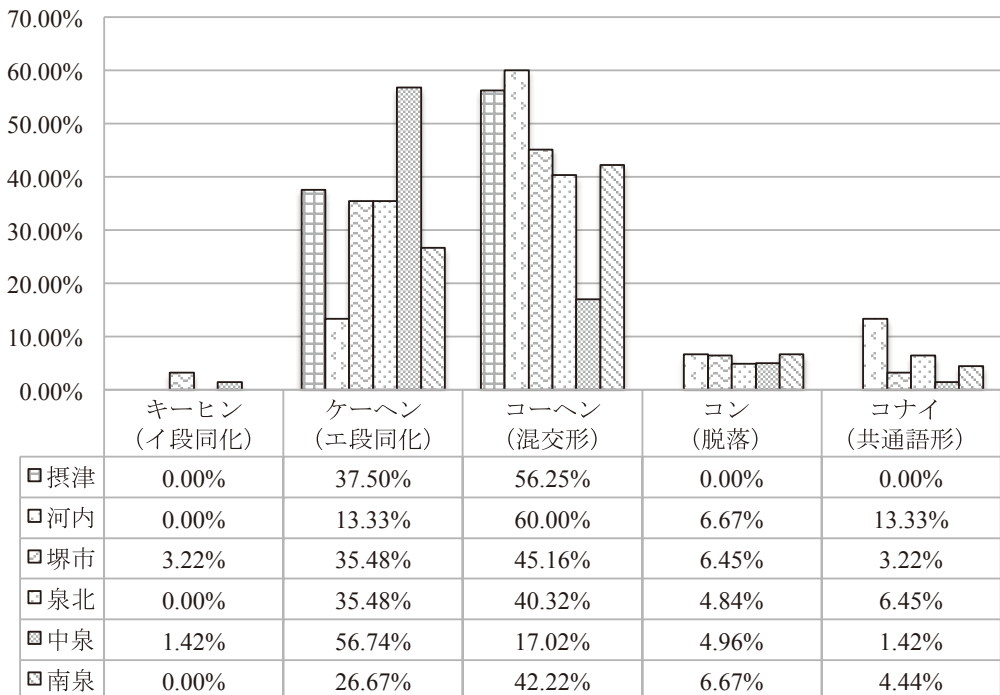
次に地域差だが、河内地域では「コーヘン」、中

泉地域では「ケーヘン」に偏った使用が認められた ($\chi^2 = 33.91, df = 5, p < .0001$)。[注：全体としての比率の違いを検出するカイ2乗検定にとどまらず、どの地域のどの変異形の使用に有意差が認められるかを検出する残差分析(residual analysis)の結果も、河内・中泉両地域の偏った使用が有意 ($p < .01$)であることを示している。]ちなみに泉州地域(泉北・中泉・南泉)だけを眺めてみても、中泉地域を除いた他の泉州2地域(泉北・南泉)では「コーヘン」(混交形)の使用が優勢で、それに「ケーヘン」(エ段同化)が続いていた ($\chi^2 = 21.69, df = 2, p < .0001$)。[注：残差分析の結果も、中泉地域と他の2地域に認められる偏った使用が有意 ($p < .01$)であることを示している。]真田(1990)が主張するように「コーヘン」が周辺方言からの流入ではなく新たな混交体系(いわゆるネオ方言)で他の変異形よりも新しいという仮説に立つと、「コーヘン」が周囲分布的に広まったとしても、岸

和田ことばに代表される個性の強い和泉方言を使用する中泉地域では従来の「ケーヘン」が強固で、新たな混交体系がそうした地域にはなかなか侵入できない。逆に、南泉地域などの周辺地域では混交形「コーヘン」が主に使用されているという解釈になる。

「キーヒン」(イ段同化)の回答例は調査地域ではきわめて少なかった(310人中3名)。これは「キーヒン」は「来ない」ではなく「(服などを)着ない」の意味に使用されるので、同音衝突の不都合を避けるためだと推測される。脱落形「コン」も数は少ないが回答例が認められ(310人中16名)、西日本で古くから使用されてきた形式が今もなお使用されていることを示している。同時に、共通語形「コナイ」もごく少数だが使用が認められた(310人中11名)。

「来ない」(カ変・不規則動詞)変異形の分布



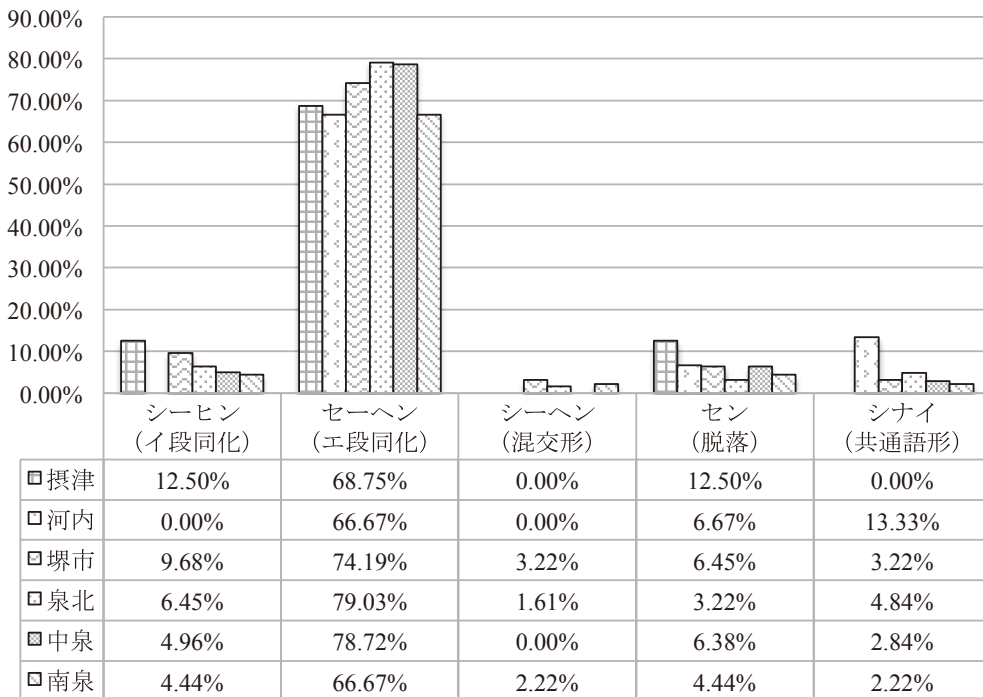
4. 2 「しない」(サ変・不規則動詞)変異形の分布
 サ行変格活用では、以下の打消表現に焦点を絞って分布を示す。

シーヒン	[ʃi-hin]	イ段順行同化
セーヘン	[se-hen]	エ段逆行同化
シーヘン	[ʃi-hen]	混交形
セン	[se-n]	脱落
シナイ	[ʃi-nai]	共通語形

変異形としては、語幹が[i]で終わっているため、「シーヒン」(イ段同化)が起りやすいと考えられるが、摂津地域(12.5%)・堺市地域(9.7%)を除き、使用平均が5%前後だった。興味深いことに、否定辞「ヒン」「イン」が使用されている河内地域ではまったく使用が認められなかった。逆に、6地域で普く伝統的な大阪方言である「セーヘン」(エ段同化)の使用がきわめて優勢だった($\chi^2=693.71, df=4, p<.0001$)。「シーヒン」「セーヘン」「セン」「シナイ」の使用を泉州3地域(泉北・中泉・

南泉)で眺めても、「セーヘン」が全域で普く顕著だった($\chi^2=1.55, df=6, p=.96$)。こうした結果から、エ段同化が定着してしまうと他の表現(イ段同化)や新しい表現(混交形)が入りにくい、もしくは(すくなくとも現時点では)従来の表現に取って代わるのは困難だと推測される。ちなみに、西日本で古くから使用されている否定辞「ン」を含んだ「セン」は、310人中18名が使用すると回答した。これは「シーヒン」を使用すると回答した人数と同数だった。このように古い形がわずかだが残ると同時に、共通語形「シナイ」(310人中11名が使用すると回答)が今後、増える傾向にあると思われる。言い換えれば、混交形をとびこえて、共通語形の使用が広がる可能性が考えられる。

「しない」(サ変・不規則動詞)変異形の分布



4. 3 「出来ない」

(上一段活用・母音動詞)変異形の分布

一段活用の動詞の調査でも、以下の4種類の打消表現に焦点を絞って分布を示す。[注：共通語形「デキナイ」の使用は、まったく認められなかった。]

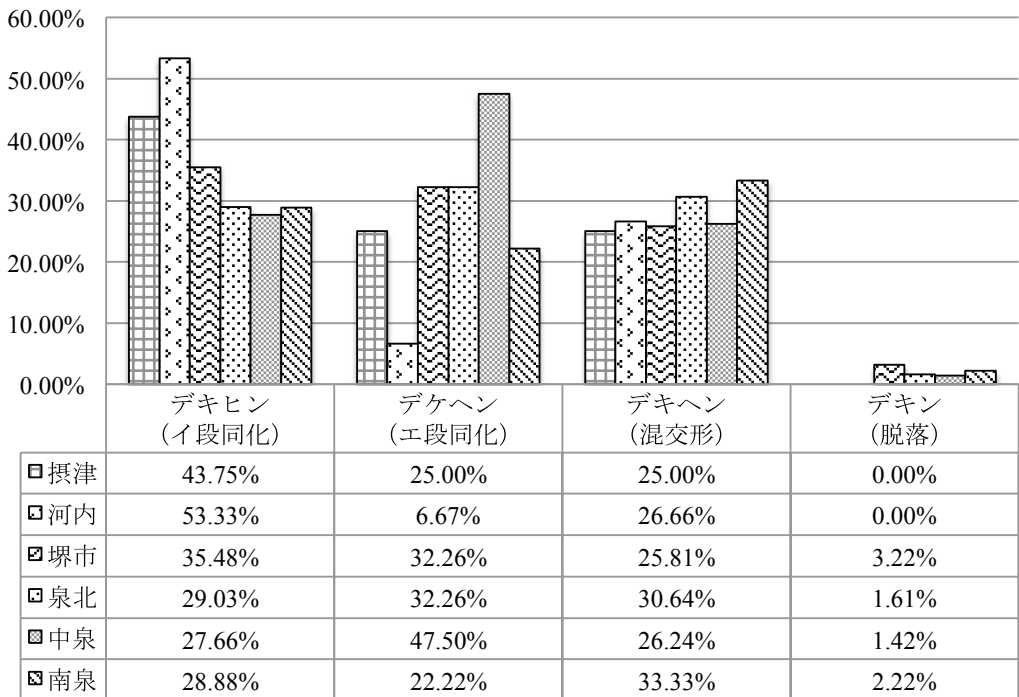
- デキヒン [deki-hin] イ段順行同化
- デケヘン [deke-hen] エ段逆行同化
- デキヘン [deki-hen] 混交形
- デキン [deki-n] 脱落

変異形としては、否定辞「ヘン」「ヒン」とその前接部の音形に注目した。つまり、「出来ない」は語幹が[i]で終わる上一段活用動詞に接続する際に音韻的な変化が起り、「デキヒン」が多くなるだろうと予測した。ところが、実際には「デキヒン」(イ段順行同化)、「デケヘン」(エ段逆行同化)、「デキヘン」(混交形)の3種類の変異形がほぼ均等な分布、つまり均衡状態を示していた($\chi^2 = 0.094, df$

$= 2, p = .95$)。

次に、地域差だが、河内地域で「デキヒン」(イ段同化)が多く「デケヘン」(エ段同化)が少ない。これは南河内地域から和泉山脈伝いの内陸部に認められてきた否定辞「ヒン」(真田ら 2009)が優勢なのだと解釈できよう。一方、岸和田市を中心とする中泉地域では伝統的な大阪方言である「デケヘン」が多いように見える。こうした状況から、岸和田ことばに代表される和泉方言(中泉方言)が強固で、他の変異形が侵入しにくい環境にあるという解釈は可能だろう。しかし、6全地域で「デキヒン」(イ段同化)、「デケヘン」(エ段同化)、「デキヘン」(混交形)の分布に有意な違いは認められなかった($\chi^2 = 9.81, df = 10, p = .46$)。泉州3地域(泉北・中泉・南泉)に絞っても、「デキヒン」「デケヘン」「デキヘン」の分布に有意な違いは認められなかった($\chi^2 = 2.35, df = 4, p = .67$)。よって、これら3種類の変異形が(地域にかかわらず)併存

「出来ない」(上一段活用・母音動詞)変異形の分布



状態にあると言えるのではないだろうか。補足だが、否定辞「ン」を含んだ「デキン」を使用すると回答したのは、310人中5名のみだった。西日本の多くの方言で使用されている否定辞が大阪府の若年層では消滅しつつある可能性が考えられよう。

4. 4 「見ない」

(上一段活用・母音動詞)変異形の分布

「見ない」も一段活用の動詞で、以下の打消表現の分布を示す。

ミーヒン	[mi:hin]	イ段順行同化
メーヘン	[me:hen]	エ段逆行同化
ミーヘン	[mi:hen]	混交形
ミン	[mi:n]	脱落
ミナイ	[mi:nai]	共通語形

「出来ない」と同様に、「ヘン」「ヒン」とその前接部の音形に注目した。「見ない」も語幹が[i]で終わる上一段活用動詞に接続した際に起こる音韻的な変化のため、イ段同化しやすく「ミーヒン」が多いだろうと予測した。変異形では、予測通り「ミーヒン」の使用が圧倒的に優勢だった($\chi^2 = 433.12$, $df = 4$, $p < .0001$)。地域差を眺めても、摂津地域での「ミーヒン」の占有率がきわめて高い(87.5%)が、これは「ミーヒン」が伝統的な京都方言であり、京都方言地域に隣接する大阪府北部の摂津地域で「ミーヒン」の使用頻度が高いという解釈が妥当かと思われる。

河内地域・堺市地域・泉北地域の3地域でも「ミーヒン」の占有率が60%を超えていた。これらの地域は大阪方言を二大別した場合はすべて摂津・河内方言地域に含まれるし、河内地域も「ヒン」は以前から分布している(岸江 2009)。よって同じような傾向が出現しても何ら不思議ではない。

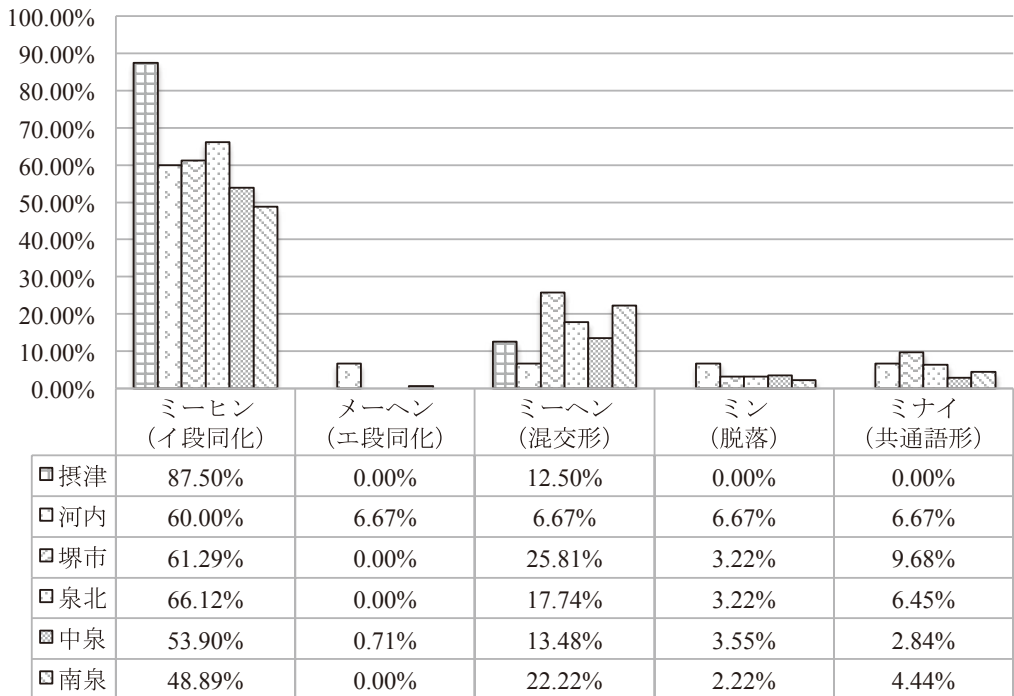
対照的に中泉・南泉地域ではイ段同化「ミーヒン」の占有率そのものはいくぶん低い。しかし、「ミーヒン」の使用は泉州3地域(泉北・中泉・

南泉)でも普く顕著だった。こうした結果から、「ミーヒン」が6地域全域に浸透していることが理解できる。「デキヒン」とは異なり、同じ一段動詞でも「ミーヒン」の場合は、周囲分布が広がり定着化したことにより伝統的な大阪方言であるエ段同化「メーヘン」を駆逐してしまったような印象すら受ける。これは尾母音同音化の傾向が変化していることを示唆している。

また、「ミーヒン」と「メーヘン」の併存よりも、「ミーヒン」と混交形の「ミーヘン」の併存が顕著であり、堺市地域や南泉地域では「ミーヘン」が20%以上の占有率になっていることも注目し得る。「ミーヘン」が新たな混交体系(ネオ方言)であるという仮説に立つなら、今後その使用が増加していく可能性が考えられる。

注目すべきは「ミナイ」の使用が脱落形の「ミン」と同数程度、もしくはそれ以上認められることである。つまり、西日本で古くから使用されてきた打消形式「ン」の使用が310人中10名で、共通語の否定辞「ナイ」の使用が310人中14名だった。こうした状況は、時系列変化を考えれば、「ン」が今後、減少する傾向にあり、一方「ナイ」は共通語化によって今後、増加していく傾向であることを示唆していると思われる。さらに、近畿方言の特徴で一音節が長めに発音されてはいるが、混交形「ミーヘン」と共通語形「ミナイ」の違いは、実は、否定辞が近畿方言の「ヘン」と共通語の「ナイ」だけである。つまり、若年層の共通語化によって「ヘン」すらも「ナイ」に置き換え、変化していく傾向を示していると思えるのではないだろうか。[注：補足だが、中泉地域で「ミラン」(141人中3名)、「ミレヘン」(141人中21名)、南泉地域で「ミラヘン」(45人中1名)と回答したインフォーマントがいた。他の地域では認められないか、もしくは姿を消してしまった一段動詞のラ行五段活用化がこれらの地域ではまだ残存していることを示している。]

「見ない」(上一段活用・母音動詞)変異形の分布



4. 5 「起きない」

(上一段活用・母音動詞)変異形の分布

「起きない」も一段活用の動詞だが、以下の3種類の打消表現に焦点を絞って分布を示す。[注: 「オケヘン」(エ段逆行同化)の回答例は、本調査では認められなかった。同様に、共通語形「オキナイ」の使用は、ほとんど認められず、わずかに泉北地域1名のみだった。]

オキヒン [oki-hin] イ段順行同化

オキヘン [oki-hen] 混交形

オキン [oki-n] 脱落

まず、「ヘン」「ヒン」とその前接部の音形に注目した。「ヘン」の直前の音節が「イ段」であるとき(つまり動詞の語幹が母音[i]で終わるとき)「ヘン」は「ヒン」に変化する。従って「起きへん」ではなく「起きひん」と言う傾向が強いだろうという予測を立てていたが、得られた結果は予測通りだった。一方、伝統的な大阪方言であるはずの「オケヘン」

(エ段同化)の使用はまったく認められなかった。さらに、「オキヒン」(イ段同化)と「オキヘン」(混交形)が拮抗していた($\chi^2 = 0.18, df = 1, p = .67$)。前述した「ミーヒン」と同様、「オキヒン」も定着化により伝統的な大阪方言であるエ段同化「オケヘン」を駆逐してしまったかのごとくである。

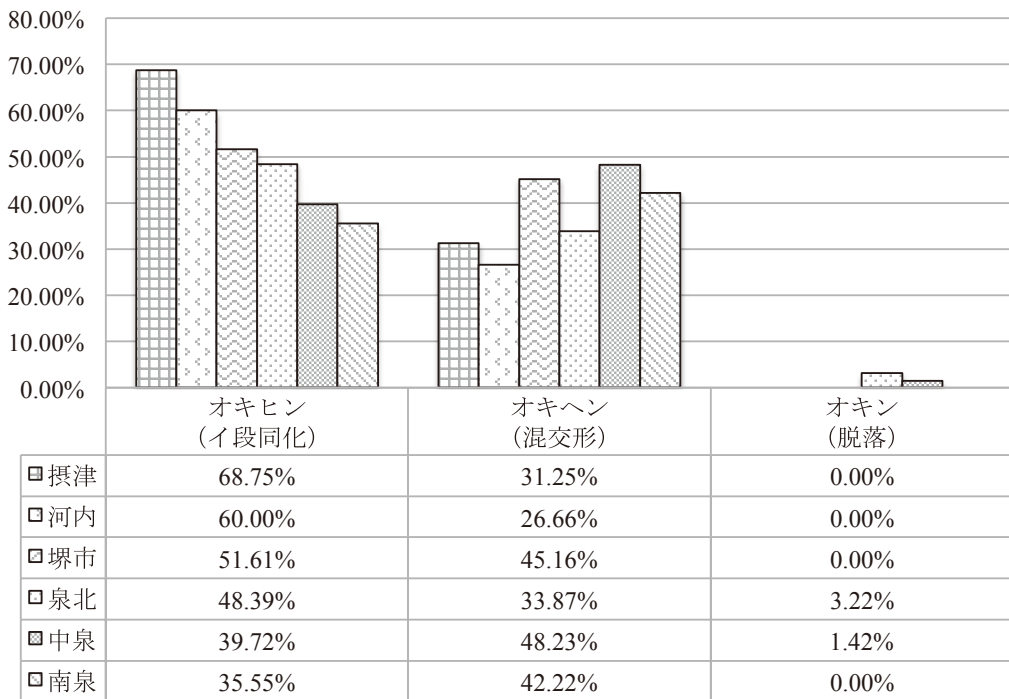
地域差を考えてみても、「オキヒン」の使用率は摂津地域が一番高く、河内地域、堺市地域、泉北地域、中泉地域、南泉地域と漸減傾向にはある。河内地域は「ヒン」の使用地域なので、少し極論だが、もし摂津方言を変革の中心と考えるなら、周囲分布的に中心から離れば離れるほど、占有率が減少しているのだろう。漸減傾向にもかかわらず「オキヒン」は全域に浸透していることが認められた。この結果からも、語幹が[i]であるため順行同化しやすく、使用率が高まると解釈できるのではないだろうか。

「オキヒン」と混交形「オキヘン」の分布に有意な

違いは認められない($\chi^2 = 7.14, df = 5, p = .21$)。しかし、「オキヘン」は全域で25%以上、堺市地域では45.2%、中泉地域に至っては半数近く(48.2%)に達しており、中泉地域でも南泉地域でも「オキヘン」のほうが「オキヒン」よりも使用率が高い。ここで「オキヘン」が新たな混交体系(ネオ方言)で他の変異形よりも新しく出現したという仮説に立つなら、これらの地域では「オキヒン」が周圏分布的に広がり、その定着化により伝統的な大阪方言「オケヘン」を駆逐、さらにネオ方言「オキヘン」が「オキヒン」を駆逐しつつあるという解釈も可能だ

ろう。もしくは、ネオ方言「オキヘン」が直接的に伝統的なエ段同化の大阪方言「オケヘン」を駆逐してしまったような印象すら受ける(しかし、共通語形「オキナイ」が普及するには至っていない)。にもかかわらず、同時に、脱落の否定辞「ン」を含んだ「オキン」を使用すると回答したインフォーマントが310人中4名(泉北地域で62人中2名、中泉地域で141人中2名)いた。西日本で古くから使用されている否定辞が使用者は少ないが、いまだに存在することは注目に値する。

「起きない」(上一段活用・母音動詞)変異形の分布



4. 6 「行かない」

(五段活用・子音動詞)変異形の分布

「行かない」は五段活用の動詞で、以下の打消表現に焦点を絞って分布を示す。ちなみに「ヘン」「ン」「ナイ」は五段動詞に接続する否定辞の基本形である。

イケヘン	[ike-hen]	エ段逆行同化
イカヘン	[ika-hen]	ア音接続・混交形
イカン	[ika-n]	脱落
イカナイ	[ika-nai]	共通語形

ここではイ段同化の「イキヒン」を含んでいない。たしかに、真田ら(2009)は北河内方言地域と南河内方言地域に「イカヒン」、中河内方言地域に「イカイン」という分布を報告している[注:佐藤(1986)も中河内地域の八尾市で「ヨマイン」(読まない)の使用を報告している]。しかし、今回の調査では(この項目が4択ではなく自己記入だったにもかかわらず)「イカヒン・イカイン」という回答がまったく認められなかった(河内地域では15人中5名が「イカヘン」を使用すると回答した。ちなみに2名が「イカナイ」と回答していた)。ここでは、簡略化して、五段動詞は(京都方言でも)通常はイ段同化せず、ア音接続すると解釈した(例:泳がない [oyoga-nai] → オヨガヘン[oyoga-hen]; 書かない [kaka-nai] → カカヘン[kaka-hen]; 勝たない [kata-nai] → カタヘン[kata-hen]; 読まない [yoma-nai] → ヨマヘン[yoma-hen])。ただ、問題は「イカヘン」がア音接続なのか、混交形なのか見分けがつかないことである。

変異形としては、「ヘン」を用いた否定表現では、五段動詞で「a+ヘン」(ア音接続)よりも「e+ヘン」(エ段同化)を多用すると予測したが、実際には逆だった。「イケヘン」は全域平均16%で、その使用が顕著だとは言いがたい。一方、音韻調和のない「イカヘン」の使用が全域平均40%と優勢で、それに「イケヘン」(エ段同化)、「イカン」(脱落)、さらに「イカナイ」(共通語形)がごくわずか(310

人中8名)と大きく離れて続く傾向が認められた($\chi^2=92.629$, $df=3$, $p<.0001$)。これはア音接続と判別できない混交形の影響があると思われる。もしくは同音の意味衝突を避けることに起因していると推測される。つまり、「イケヘン」は京都方言では「行くことができない」という可能の意味で用いられることが多く、京都方言地域と隣接する地域(摂津方言地域)では否定の「イケヘン」と可能的「イケヘン」の同音衝突を避け区別するために以前から京都方言と同様の「イカヘン」(ア音接続:「a+ヘン」)が使用されてきた(岸江・中井 1994; 真田ら 2009)ことと関係があると推測される。

「イカン」は前述したように「行かぬ」から変化した打消形式で、「行かない」という言い切りの場合、中四国や九州地方など、西日本の大多数の方言では「イカン」が専用される(真田ら 2009)。西日本で古くから使用されてきた形式が若年層でも安定的に使用されていること(310人中81名)を示している。

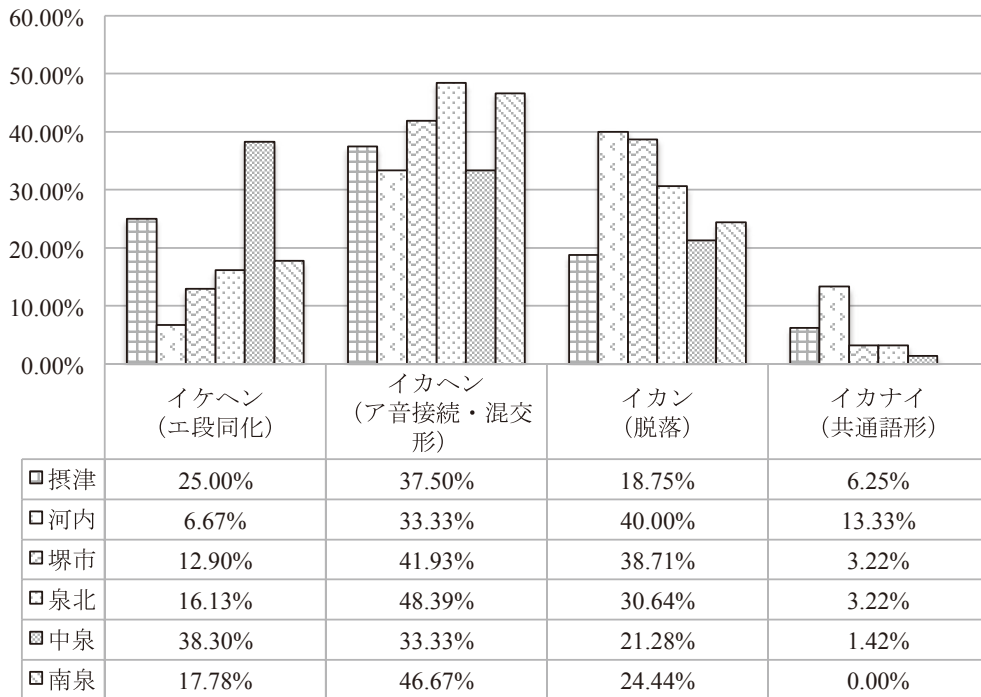
次に地域差だが、真田ら(2009)は大阪府北部では「イカヘン」、府南部では「イケヘン」がそれぞれ優勢だと報告している。本調査でも「イカヘン」と「イケヘン」の分布には有為差が認められた($\chi^2=16.54$, $df=5$, $p<.01$)。これは(周囲分布的に捉えれば、変革の中心である)河内地域で「イケヘン」の使用率がきわめて少なく(6.7%)、一方(強固な方言地域である)中泉地域で「イケヘン」(エ段同化)に偏った使用(38.3%)が認められることに起因していると考えられる。

泉州3地域(泉北・中泉・南泉)に絞って眺めてみても(方言地域として個性の強い)中泉では「イケヘン」(エ段同化)の使用が顕著だが、他の泉州2地域(泉北・南泉)では「イカヘン」(ア音接続・混交形)の使用が顕著である($\chi^2=14.27$, $df=4$, $p<.01$)。岸和田ことばに特徴づけられる個性の強い中泉地域は京都方言地域(さらには革新の中心である摂津方言地域)とは遠く離れているので、「イ

カヘン」が伝統的な大阪方言「イケヘン」に取って代わることができないのだという解釈が妥当かと思われる。周辺地域を考えても、泉北地域は摂津・河内方言地域なので、「イカヘン」の使用が高くても(48.4%)不思議ではない。一方、南泉地域は中泉地域よりも周囲分布の中心からさらに離れ

て南に位置している。それにもかかわらず「イカヘン」の使用度が高い(46.7%)理由として、中泉地域に比べて言語個性がさほど強くない南泉地域では「イカヘン」の浸透が容易であったと推測できるのではないだろうか。

「行かない」(五段活用・子音動詞)変異形の分布



4. 7 「構わない」

(五段活用・子音動詞)変異形の分布

「構わない」も五段活用の動詞で、「ヘン」「ン」「ナイ」が五段動詞に接続する否定辞の基本形だが、以下の4種類の打消表現の分布を示す。[注：共通語形「カマワナイ」の使用は、ほとんど認められず、わずかに河内地域1名のみで、しかも「カマワナイデ」と回答していた。]「構わない」は「行かない」とは異なり、混交形が(すくなくとも理屈の上では)「カマワヘン」となり、ア音接続の「カマヘン」とは区別可能だからである。

- カメヘン [kame-hen] エ段逆行同化
- カマヘン [kama-hen] ア音接続
- カマワヘン [kamawa-hen] 混交形
- カマワン [kamawa-n] 脱落

変異形としては「カマヘン」(ア音接続)の分布が優勢だった($\chi^2 = 79.01, df = 3, p < .0001$)。もちろん、この結果を踏まえて前述の「イカヘン」の使用の多くがア音接続であるとは断定できない。さらに、大きな地域差もなく、6全地域で「カメヘン」(エ段同化)、「カマヘン」(ア音接続)、「カマワヘン」(混交形)の3つの変異形の分布に有意な違い

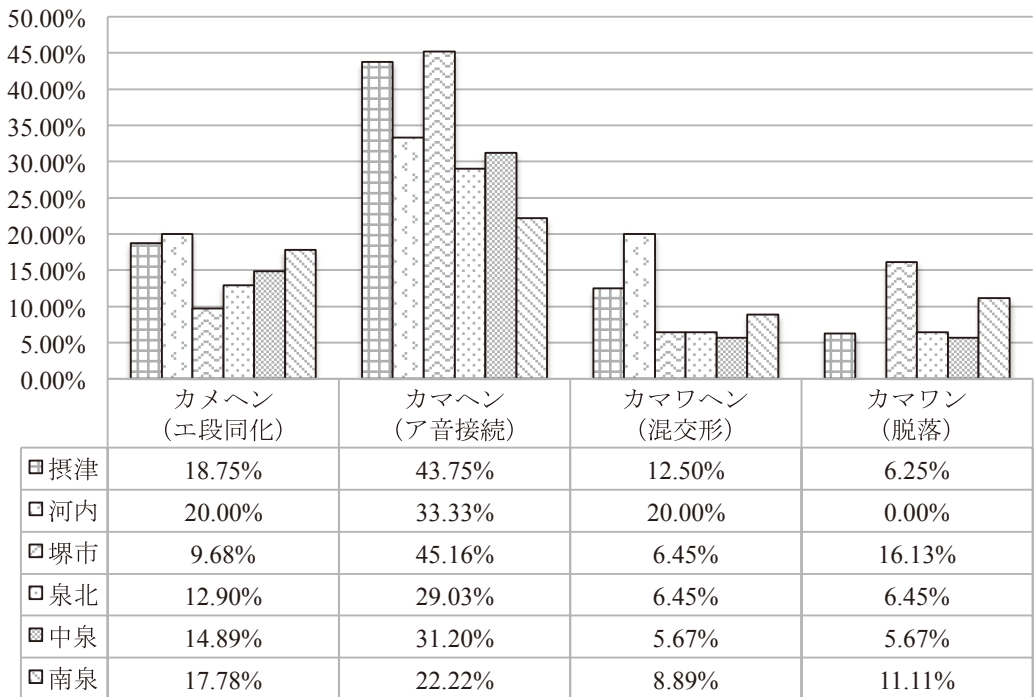
は認められなかった ($\chi^2 = 5.81, df = 10, p = .83$)。

脱落の否定辞「ン」を含んだ「カマワン」の使用も310人中23名認められた。西日本で古くから使用されている否定辞を使用する若年層が(数は少ないが)まだ存在することがわかった。

最後に、ここでもイ段同化の否定辞「ヒン」を含

んでない。実際に、摂津方言地域でも河内方言地域でもそうした使用はまったく認められなかった。たとえば、河内地域では15人中3名が「カメヘン」、5名が「カマヘン」、3名が「カマワヘン」を使用すると回答していた。

「構わない」(五段活用・子音動詞)変異形の分布



4. 8 「行かなかった」

(五段活用・子音動詞 過去)変異形の分布

「行かない」の過去形に関しては、以下の5種類の変異形に焦点を当てた。前述したように、五段動詞のためイ段同化は基本的に出現せず、ア音接続「イカヘンカッタ」になる。また、大阪方言では室町期以来の古形とされる「～ナンダ」系、そして新形「～カッタ」系の2形式の過去形表現形式が存在する(佐藤 1986; 真田ら 2009)。

イカナナンダ [ika-nanda] (ナンダ系)

イケヘンカッタ [ike-hen-katta] エ段逆行同化+過去(カッタ系)

イカヘンカッタ [ika-hen-katta] ア音接続・混交形+過去(カッタ系)

イカンカッタ [ika-n-katta] 脱落+過去(カッタ系)

イカナカッタ [ika-na-katta] 共通語形+過去(カッタ系)

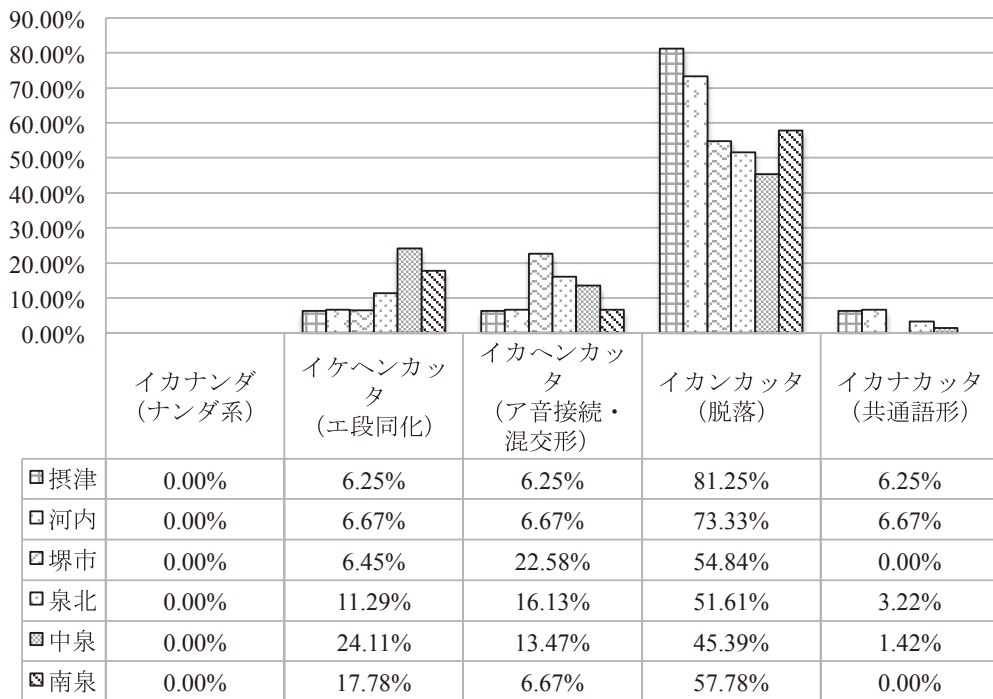
まず、ナンダ系はまったく出現しなかった。この結果を見る限りでは、真田ら(2009)が指摘・予測した通り、若年層は(老年層が使用する)ナンダ系ではなく、カッタ系を使用していた。つまり、大阪府全域でナンダ系が衰退しカッタ系の使用が主流となっていた。過去否定の変異形としては、「イカナナンダ」を除く4変異形でカイ2乗検定を試みたが、脱落形「イカンカッタ」の使用が圧倒的に優

勢だった($\chi^2 = 209.93, df = 3, p < .0001$)。「イカン」は西日本の多くの方言で専ら使用されてきた形式だが、過去形(kaQ形)で、その使用がとりわけ顕著だったと言えよう。

一方、地域差では、泉州3地域(泉北・中泉・南泉)で「イケヘンカッタ」「イカヘンカッタ」「イカンカッタ」を比較しても、脱落形「イカンカッタ」が普く顕著だった($\chi^2 = 6.73, df = 4, p = .15$)。脱落形の生成過程は、いくつか考えられるが、人それぞれの認知レベルでのプロセスに限れば、イカヘンカッタ(ika-hen-katta) → イカンカッタ(ika-n-

katta)ばかりでなく、イカナカッタ(ika-na-katta) → イカンカッタ(ika-n-katta)という音便化も候補として挙げられよう。ただし、上述したように、これらの可能性は方言話者、ひとりひとりの認知プロセス、つまり認知的に個人差があるとの仮定に立脚しており、方言全体としての方向性による変化とは必ずしも言えないだろう。ただ、長い動詞形では脱落、つまり西日本で古くから使用されてきた形式が起こりやすいというのはたしかだろう。ちなみに、共通語形過去「イカナカッタ」の使用は310人中6名だった。

「行かなかった」(五段活用・子音動詞 過去)変異形の分布



4. 9 「知らなかった」

(五段活用・子音動詞 過去)変異形の分布

五段動詞「知らない」の過去形に関しても、「行かない」の過去形同様、ア音接続2種類とナダ系の計3種類の変異形に焦点を当てた。[注：エ段逆行同化+過去「シレヘンカッタ」ならびに共通語形過

去「シラナカッタ」は、まったく出現しなかった。]

- シラナンダ [jira-nanda] (ナダ系)
- シラヘンカッタ [jira-hen-katta] ア音接続・混交形+過去(カッタ系)
- シランカッタ [jira-n-katta] 脱落+過去(カッタ系)

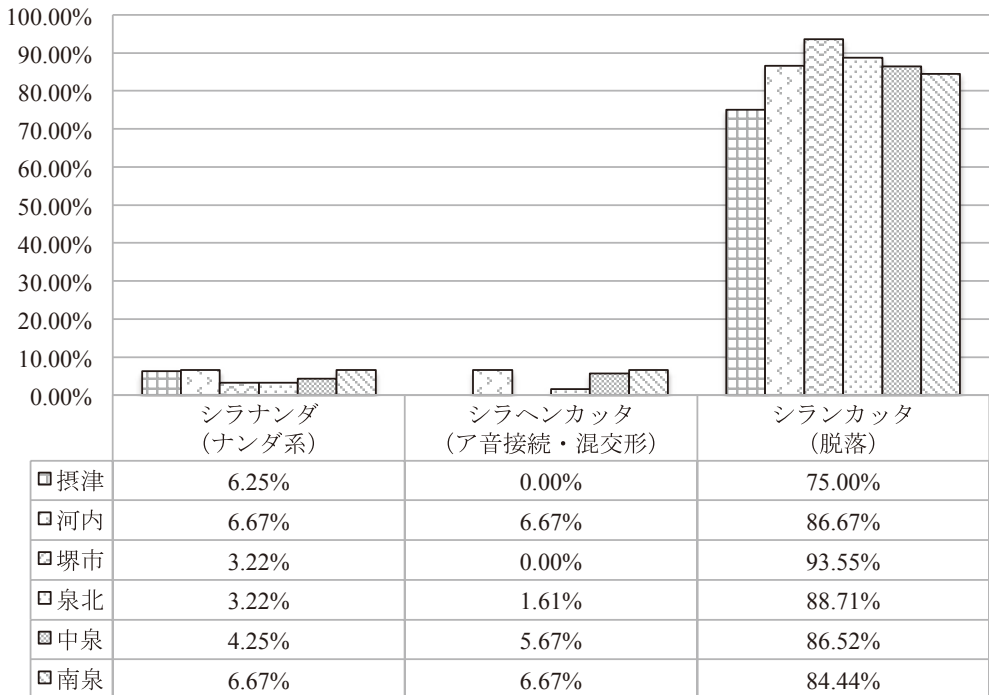
「ン」は、これまで繰り返し述べてきたように、中国・四国や九州地方など西日本で古くから専用

されてきた形式だが、脱落形「シランカッタ」の使用が圧倒的に優勢だった($\chi^2 = 441.09, df = 2, p < .0001$)。地域差では、泉州3地域(泉北・中泉・南泉)を眺めてみても「シランカッタ」が普く顕著だった($\chi^2 = 2.59, df = 4, p = .63$)。ここでも、人それぞれの認知レベルでの脱落形の生成には、シラヘンカッタ(jira-hen-katta)→シランカッタ(jira-n-katta)やシラナカッタ(jira-na-katta)→シランカッタ(jira-n-katta)といった音便化の可能性が考えられよう。

驚くべきは、過去否定の「否定辞+kaQ形」ではなく、310人中14名が「シランナダ」を使用すると回答していることである。「『昨日は、学校に行ったか』と家の人から聞かれて、『行かなかったよ』と答えるとき、どう言いますか」と尋ねる自由回

答質問とは異なり、「知らなかった」は選択型質問で4択の中に「シランナダ」という回答が含まれている。このため、インフォーマントの回答を間接的に誘導してしまった可能性は否定できない。しかし、ある特定の仲間内・友人同士や方言話者だけで通じる言葉や言い回し、つまりジャーゴン(jargon)として「シランナダ」をカッタ系と併用している可能性が考えられる。もしそうであれば、お互いが理解できる言葉で話そうとする意識(つまり、相手に合わせた言葉遣い)の表象との発話適応理論(Giles, Coupland, & Coupland, 1991; Giles & Powesland, 1975)からの理解が適切だろう。いずれにせよ、「～ナダ」系の回答数は非常に低く、大勢としてはいずれ消え行く語形だと予測できよう。

「知らなかった」(五段活用・子音動詞 過去)変異形の分布



5 考察：変異形に認められる傾向・制約・合理性

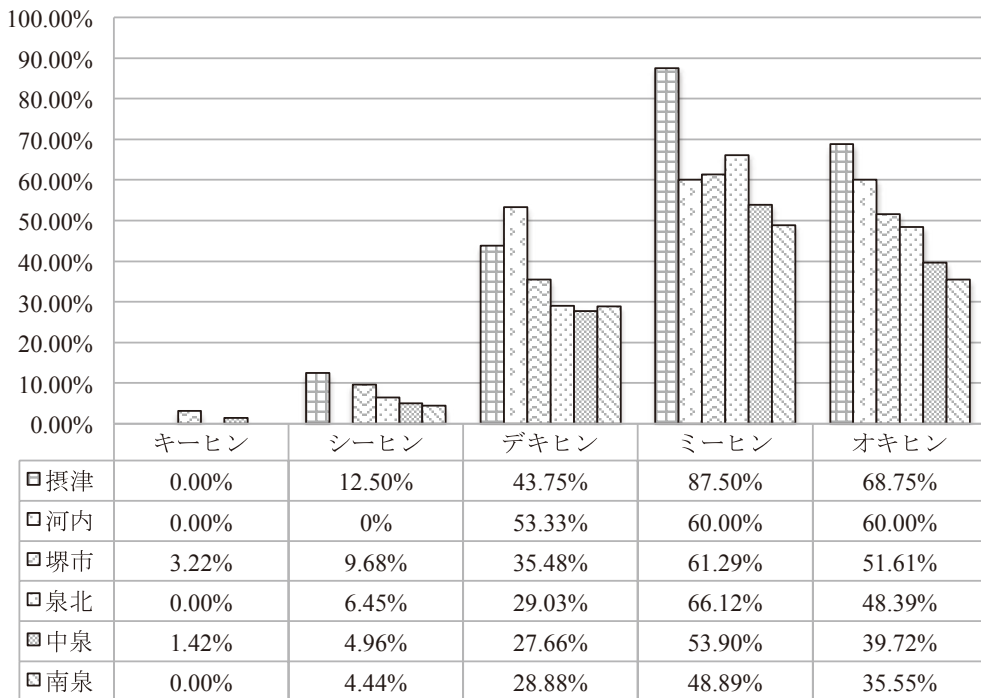
大阪方言の打消形式には数多くの形式が併存している。とりわけ(西日本の多くの方言で古くから専用されてきた脱落形式)「ン」→「ヘン・ヒン」[(近畿圏の諸方言で用いられる形式である)エ段同化/イ段同化]→混交形[標準語の語幹+(近畿方言の否定辞)ヘン]→共通語形という想定されるシフト(変遷)の過程で、若年層の現在の立ち位置、つまり、どの形式を好んで用いているのか、そして、それにはどのような言語的、社会地域的制約が要因となっているのかを探ることが本調査の主眼であった。本節では、変異形の視点から、

その傾向を眺め、図示する。図示化することで、どのような制約が存在するのか、考えられる単純化・合理化の過程を探る。

5. 1 イ段順行同化

「デキヒン[deki-hin]」(310人中96名)、「ミーヒン[mi-hin]」(310人中181名)、「オキヒン[oki-hin]」(310人中138名)など、語幹の最後が母音[i]で終わる上一段活用の動詞では、イ段同化が顕著だった($\chi^2=267.60, df=4, p<.00001$)。同じく語幹の最後が母音[i]で終わるサ行変格活用の場合、伝統的な大阪方言に特徴的なエ段同化の「セーヘン[se:-hen]」の定着が原因なのか、サ行変格活用のイ段同化「シーヒン」はごくわずか(310人中18名)だった。

イ段同化

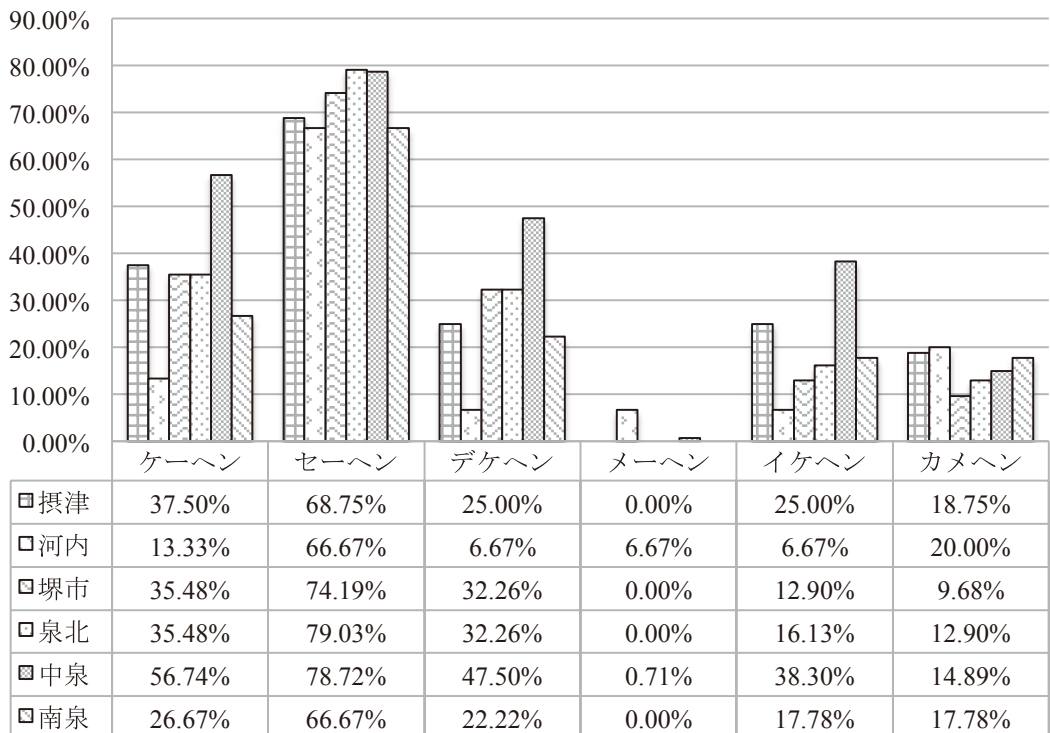


5.2 エ段逆行同化

サ行変格活用「セーヘン」では、エ段同化が顕著だった(310人中234名が使用すると回答)。また、カ行変格活用「ケーヘン」でもエ段同化の高い使用(310人中133名)が認められた。一方、上一段動詞では、「デケヘン」(310人中94名)はともかく「メーヘン」(310人中2名)、「オケヘン」(310人中0名)だった。これは、否定辞の前接部の音形、つまり語幹が[i]で終わる上一段活用動詞に接続する場合には、音韻的な変化(イ段同化)が起き「ミーヒン」「オキヒン」が出現しやすいからだと考えられる。見方を変えて、「ヒン」は「ヘン」が上一段動詞に接続する際に起こる音韻的な変化だと考えれば、「出来ない」のような上一段動詞に「デケヘン」が「デキ

ヒン」と併用でこれだけの頻度で使用されているのである。だから、語彙によっては上一段動詞であっても伝統的な大阪方言形式が今も強く残っている状況を示しているとも解釈できよう。しかし、五段動詞でも、「イケヘン」(310人中81名)、「カメヘン」(310人中46名)とエ段同化の使用が比較的少なかった($\chi^2 = 324.87, df = 5, p < .00001$)。以上より、語彙によっては伝統的な近畿方言否定辞「ヘン」が定着しており、それ以外の変異形が侵入する余地がさほど残っていない場合(例:サ変)もあるが、多くの場合は他の変異形と併存している、もしくは音韻的制約などの理由で使用率がかなり低い(例:「メーヘン」)と推測される。

エ段同化



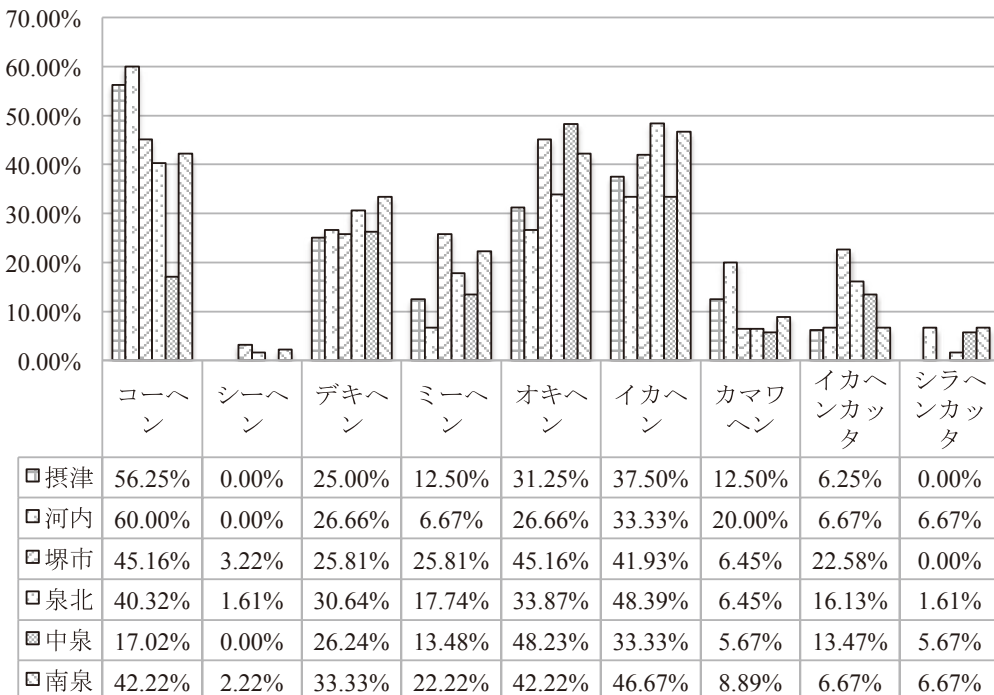
5. 3 混交形(音韻調和なし)

混交形は音韻調和のない変異形だが、より整然とした体系の追求、もしくは既存の形式の結果としての新たな言語形式・規則だと捉えられる。本調査では、ア音接続なのか混交形なのか区別がつかない五段動詞「イカヘン」(310人中122名が使用すると回答)、「イカヘンカット」(310人中41名)、「シラヘンカット」(310人中13名)のような場合もあるが、サ行変格活用「シーヘン」(310人中3名)を除く多くの動詞で、混交形式の使用頻度が高かった。とりわけ、カ行変格動詞「コーヘン」(310人中100名)や上一段動詞「デキヘン」(310人中87名)、「ミーヘン」(310人中51名)、「オキヘン」(310人中131名)において混交形の使用は顕著だった($\chi^2=180.23, df=5, p < .00001$)。[注：ア音接続なのか混交形なのか区別がつく「構わない」の混交形「カマワヘン」はカイ2乗検定に含めたが、「イカヘン」

はア音接続なのか混交形なのか区別がつかないのでカイ2乗検定から除外した。過去形もカイ2乗検定から除外した。ちなみに「カマワヘン」の使用は310人中23名だった。]

混交形は規則が単純で、「標準語の語幹+(近畿方言の否定辞)ヘン」で生成可能なので、動詞の活用に関係なく適用できる。つまり、標準語の語形さえわかっているならば混交形を形成することができる。こうした論理に従うと、「しない」は「シ+ナイ」なので、標準語の語幹+ヘン「シーヘン」が多いはずだという予測になる。ところが、「シーヘン」使用者は310人中3名にすぎなかった。「シーヘン」使用者が少ないのは、伝統的な大阪方言「セーヘン」(310人中234名)が定着しており、「シーヘン」の侵入する余地がさほど残っていないからだと推測される。

混交形



5. 4 脱落

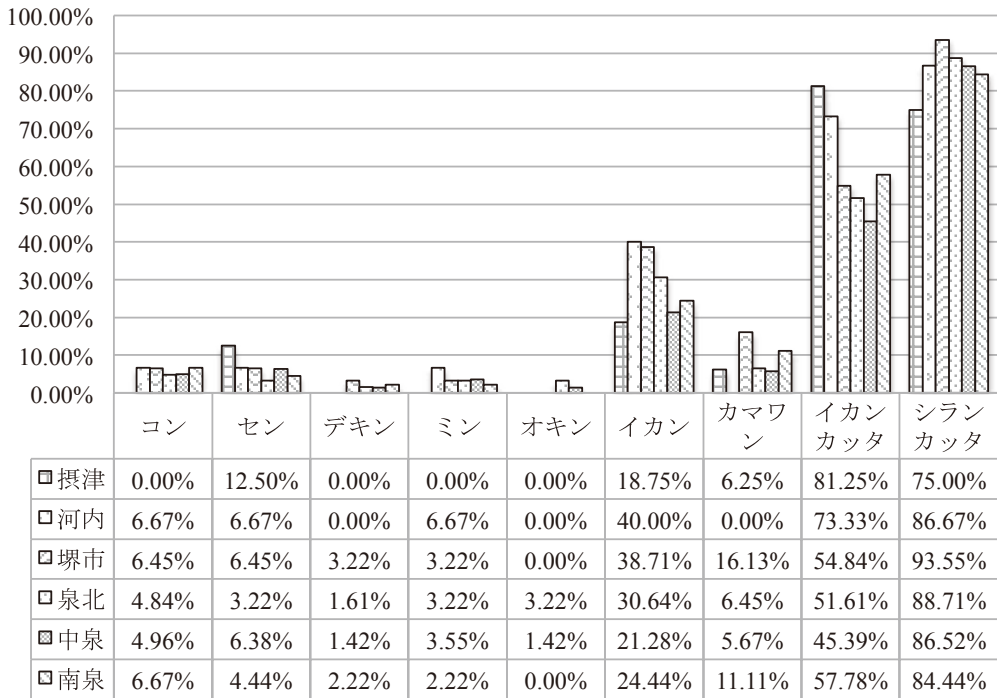
西日本で古くから専用されてきた「ン」の使用内訳は、現在形「コン」(310人中16名が使用すると回答)、「セン」(310人中18名)、「デキン」(310人中5名)、「ミン」(310人中10名)、「オキン」(310人中4名)、「イカン」(310人中81名)、「カマワ」(310人中23名)だった。これらの比較から、変格活用と上一段動詞では脱落が少ない、見方を変えて言うと、五段動詞では脱落が多いことがわかった ($\chi^2 = 191.26, df = 6, p < .00001$)。

次に、上記の五段動詞の現在形「イカン」(81名)「カマワ」(23名)と、同じく五段動詞の過去形「イカンカッタ」(310人中163名)「シランカッタ」(310人中269名)との比較から、過去形では脱落が

有意に多いことと認められた ($\chi^2 = 255.194, df = 3, p < .00001$)。よって(本調査では、変格活用や一段動詞の過去形を含めていないので、五段動詞に限るが)長い動詞形に西日本特有で古くから使用されてきた否定辞「ン」が出現しやすいと推測できる。

ここで、本稿の最初に述べた若年層の表現 — 大阪方言の「行かんくてもええ・行かんくなる」共通語の「観れんくなった」 — を想起されたい。これらも長い動詞形である。単純に考えれば、長い動詞形には古くから使用されてきた否定辞「ン」が今も残っていることになるが、こうした「ン」の使用は音便化などの認知プロセスの結果だという解釈も可能ではないだろうか。

脱落



6 要約

本研究では、動詞の否定辞に焦点を当て、異なる言語形式・規則が変異形(バリエーション)として併存することを確認した。どのような変異がなぜ併存するのか、その分布と理由を垣間見るため(カ変・サ変・一段・五段など)動詞の活用形の種

類や現在形・過去形などの言語的要因ばかりでなく、年齢や出身(方言)地域に代表される社会的要因の側面から分析を試みた。すでに提示した表2に使用頻度が高かった否定辞の変異形にシェード(網掛け)をし、本調査結果から考えられる変異の要因を書き加えたのが表3である。

表3 否定辞の変異形と考えられる変異の要因

動詞	イ段同化	ア音接続	エ段同化	混交形	脱落
「来ない」 (カ変・不規則)	キーヒン [ki-hin]	×	ケーヘン [ke-hen]	コーヘン [ko-hen]	コン [ko-n]
「しない」 (サ変・不規則)	シーヒン [ʃi-hin]	×	セーヘン [se-hen]	シーヘン [ʃi-hen]	セン [se-n]
「出来ない」 (上一段・母音)	デキヒン [deki-hin]	×	デケヘン [deke-hen]	デキヘン [deki-hen]	デキン [deki-n]
「見ない」 (上一段・母音)	ミーヒン [mi-hin]	×	メーヘン [me-hen]	ミーヘン [mi-hen]	ミン [mi-n]
「起きない」 (上一段・母音)	オキヒン [oki-hin]	×	オケヘン [oke-hen]	オキヘン [oki-hen]	オキン [oki-n]
「行かない」 (五段・子音)	×	イカヘン [ika-hen]	イケヘン [ike-hen]	イカヘン [ika-hen]	イカン [ika-n]
「構わない」 (五段・子音)	×	カマヘン [kama-hen]	カメヘン [kame-hen]	カマワヘン [kamawa-hen]	カマワン [kamawa-n]
「行かなかった」 (五段・子音)	×	イカヘンカッタ [ika-hen-katta]	イケヘンカッタ [ike-hen-katta]	イカヘンカッタ [ika-hen-katta]	イカンカッタ [ika-n-katta]
「知らなかった」 (五段・子音)	×	シラヘンカッタ [ʃira-hen-katta]	シレヘンカッタ [ʃire-hen-katta]	シラヘンカッタ [ʃira-hen-katta]	シランカッタ [ʃira-n-katta]

イ段順行同化が
起こりやすい音
韻環境

音韻調和のない接
続形式

伝統的な大阪方言
に特徴的なエ段逆
行同化

音韻調和のない接
続形式

長い過去形で起こ
りやすい古い形式
「ン」

6. 1 言語的要因

6. 1. 1 イ段順行同化

上一段動詞のイ段同化「デキヒン」「ミーヒン」「オキヒン」の使用が顕著だった。語幹の最後が母音[i]で終わる上一段活用の動詞ではイ段同化が顕著だが、それ以外の動詞ではイ段同化しにくいという現象が認められた。さらに、同じく語幹最後の母音が[i]で終わるサ行変格活用の場合、イ段同化の使用はわずかしか認められなかった。伝統的な大阪方言に認められるエ段へのシフト現象、すなわちエ段同化の「セーヘン」が強い勢力を持って定着しているために、「シーヒン」が取って代わることができなかった、もしくは浸透しなかったことが主な理由ではないかと推測される。

6. 1. 2 エ段逆行同化

「セーヘン」が全域で最も使用頻度が高く、各地域で60%以上の使用が見られた。これは、大阪方言話者はエ段同化を好むという傾向を顕著に示す一例であると考えられる。「ケーヘン」「デケヘン」も中泉地域では、それぞれ半数以上(56.7%)、半数近く(47.5%)のインフォーマントが使用すると回答した。しかし、これを周囲分布の中心から離れているのが理由だとは解釈できない。なぜなら、中泉地域よりもさらに周囲分布の中心から離れている南泉地域では、「ケーヘン」「デケヘン」を使用すると回答したインフォーマントはそれぞれ3割弱(26.7%)、2割強(22.2%)にすぎなかったからである。これは中泉地域が個性の強い方言地域で、元々の大阪方言の特徴であるエ段同化が強く残っているが、中泉地域と比較すれば(たとえ中泉の)周辺地域でも(さほど)強固な方言地域ではない南泉地域ではエ段同化という特徴が強くは残っていないという解釈になるのではないだろうか。[注：他地域から南泉地域への人口流入の結果という社会的要因の可能性も否定できない。]

6. 1. 3 混交形

真田(1990)は「コーヘン」が周辺方言からの流入ではなく共通語(標準語)「コナイ」の干渉による共通語との混交(新方言もしくはネオ方言)だと主張する。「コーヘン」の浸透が顕著で、中泉地域を除く全地域で「ケーヘン」の使用を上回っていた。逆に言えば、強固な方言地域である中泉では、「ケーヘン」が56.7%に対して「コーヘン」が17.0%と、混交形が浸透していなかった。「デキヘン」も全域で使用が認められ、インフォーマントの3割前後が使用するという結果であった。音韻調和のない「イカヘン」の使用頻度も高く、全地域で3割もしくは4割を超えていたが、「イカヘン」は、ア音接続なのか、混交形なのか、さらには使用意図としても意味衝突の回避なのか判別できない。混交形と単に音韻調和のない場合(例：「イカヘンカッタ」「シラヘンカッタ」を含む五段動詞のア音接続)の区別は多くの場合において困難である。

6. 1. 4 脱落形式+カッタ[省力化・単純化]

「ン」が用いられる場面は、先述した通り、すくなくとも歴史的には強く言い切る場合や慣用表現で限定的なものだった。にもかかわらず、全域で「イカン」が使用され、特に過去形「イカンカッタ」「シランカッタ」の使用は圧倒的に多かった。「ン」が西日本で古くから用いられてきた形式(金沢1998;松本2011)で、その成立は歴史の変遷からは以下のIということになるのだろうが、IIとIIIも認知的には推測可能ではないだろうか。本稿では報告しなかったが、「しない」「出来ない」「見ない」には、それぞれ「シヤン」「デキヤン」「ミヤン」といった否定表現も存在することが回答から認められた。文法規則は人それぞれが頭の中で認知的に構築し体系化しているものなので、ひとりひとりがある程度まで異なる言語形式・規則を生成していたとしても何ら不思議ではないだろう。

I. 「行かぬ・知らぬ」から転じた「イカン・シラ

ン]+過去形表現「カット」

- II. 「イカヘンカット」「シラヘンカット」という形に脱落が起こり「イカンカット」「シランカット」となった従来の否定形、もしくは混交形内での脱落
- III. 共通語の「イカナカット」「シラナカット」の「ナ」が「イカンカット」「シランカット」と音便化

6. 2 地域・社会的要因

変異形の選択は、動詞の種類・時制に影響を受けていることが明らかになったが、当該地域の地理的な位置状況(例:どのような方言地域と隣接しているか、山間部か、海岸か)、さらには元来話されている地域方言の強固さなど、地域・社会的要因も検討課題であることがわかった。

6. 2. 1 年齢

本調査では高校生を対象としたので年齢には統制を加えているが、ここでは間接的ながら、真田ら(1990; 2009)の調査結果と比較することにする。否定表現過去形「行かなかった」「知らなかった」(いずれも五段動詞)を調査した。真田ら(2009)の調査時(1990年)の70歳以上のインフォーマントでは、「～カット」形(例:「イカヘンカット」「イカヘンカット」「イケヘンカット」)が散見されるものの、室町期以来の古形とされる「～ナンダ」系変異形(例:「イカナンダ」「イカイナンダ」「イカヘナンダ」)の使用が数多く認められ、大阪府下のかなりの地域を覆っていた。真田ら(1990; 2009)は、「～ナンダ」系が主に老年層でよく使用される傾向があるのに対し、「～カット」系は若年層で使用され、顕著な対立を示す言語形式であることを指摘した上で、今後、大阪府全域で「～ナンダ」系が後退・衰退し「～カット」系が勢いを増すであろうと予測した。

今回の高校生の言語使用調査では、「シラナン

ダ」の使用はごくわずかだが認められたのに対し「イカナンダ」はまったく使用されていなかった。しかし、回答形式が異なるので「イカナンダ」が完全に消滅したとは断言できない。いずれにせよ、「ナンダ」形式はいずれ消え行く語形だという予測を支持する結果となったが、消滅したわけではなく語彙によっては残る可能性がある。

もちろん、現調査はアンケート調査なので、高校生がどのようなコンテキストで「～ナンダ」系変異形を使用しているかは不明である。もしかしたら、興味本位で「知らなんだ」と使用している可能性があるし、ある特定の仲間内、たとえば友人同士や家族内(家族に高齢者がいる)など、方言話者だけで通じる言葉や言い回しとしてのジャーゴン(jargon)の特性を示している可能性も考えられる。しかし、もしそうであれば、お互いが理解できる言葉で話そうとする意識(つまり、相手に合わせた言葉遣い)、他集団との差異化・同世代の仲間への帰属意識の表象として発話適応理論(Giles, Coupland, & Coupland, 1991; Giles & Powesland, 1975)からの理解が適切かと思われる。

6. 2. 2 出身地域

家族が両親とも大阪府(もしくは近畿地方、西日本)出身なのか、他地域出身者なのかなど、出身地域は、変数としては統制困難な側面があることは否定できない。さらに、学校で他地域の学生と交わることで、影響を受けることもあるだろうし、特定の語彙がピジン(pidgin)もしくはクレオール(creole)、つまり、近畿圏でも異なる地方出身者の間で使用される接触方言コイナー(koiné)として共通語化していくという側面(南2009)も否定できない。にもかかわらず、摂津地域では「ミーヒン」、河内地域では「デキヒン」、摂津・河内地域では「オキヒン」のイ段順行同化形式がきわめて多かった。イ段同化は伝統的な京都府

言でよく起こる現象である。今回の調査でも「デキヒン」の使用が京都方言地域に隣接する摂津・河内方言地域により多く認められた。しかし、京都方言地域から地理的には遠く離れた中泉地域や南泉地域など泉南(和泉)方言地域でも「デキヒン」は3割弱、「オキヒン」は4割弱の使用が認められた。こうした結果から、南河内から和泉山脈伝いの内陸部に認められる打消形式「ヒン」の存在も無視できない。『方言圏論』は、中央から同心円状に同じような語彙や言い回しが存在し、中央から離れて辺境に行けば行くほど、古い時代には中央で使用されていたが、現在ではもう使用されていないものが、辺境には今も存在し分布していることがあるという論である(柳田 1930)。圏分布的に解釈すれば、言語形式・規則の伝播は漸次的だが、摂津・河内方言が大阪方言の中心的存在となり、言語の革新地としての役割を担っていることを示唆していると考えられる。混交形は動詞の未然形に近畿方言の代表的な否定辞「ヘン」を付加したもので、地域方言らしさを維持しながら「中間的なスピーチスタイル」(真田 2006)となっているが、これも同様なプロセスで拡散するだろうし、混交形が「中間地点」となってさらに共通語にシフトしていく可能性も考えられよう。

7 おわりに

人は周囲の人々と絶え間なく言葉を交わし、他者の使う言葉を聞いている。社会言語学では、実際に社会で進行中の言葉の変化を捉え、言葉の変化と社会的要因の関わりを明らかにし、なぜそうした変化が起こるのかという原因とメカニズムを明らかにすることを、その目的としている。言語使用者は、さまざまな文法項目・規則を頭の中に蓄積しているが、それをできる限り単純な体系として構築・運用しようとする傾向が認められる(例: 形容詞否定形「～くない」を形容動詞にまで敷衍した「変くない」「きれくない」)。そのほうが認知的経済効率が高いからである。たとえば、音韻調和のない混交形では、従来の同化形式(イ段同化・エ段同化)の音韻的合理化とは異なる意味で、既存の文法形式の合理化・単純化が認められる。混交形はカ行変格活用「コーヘン」でとりわけ顕著だったが、他の動詞でも使用され徐々に増えつつあると推測される。さらには「ヘン」という否定辞も共通語化によって「ナイ」へと変化し(アクセントはさておき)方言色の薄い標準語形が用いられるようになる可能性がある(朝日 2004)。一方、過去形で顕著だった脱落形式「ン」は、西日本で古くから使用されてきた形式だが、過去形では現在も残っている、そして今後も残っていく形式だと考えられる。このように考えれば、「ヘン」も他集団との差別化を表す機能として、もしくはマーカーとして有標化して残っていく可能性が考えられる。最後に、第二言語話者ばかりでなく、日本語を母語とする第一言語話者でも、地域方言を知らないために発生するトラブルに巻き込まれないとは断言できない。また、地域方言の会話に入り込めないために感じる疎外感に悩まないためにも、第一言語であれ第二言語であれ、地域方言を理解することは重要な課題だと考えられる。このように、社会政策から考えても、日本語教育か

ら考えても、地域方言の正しい理解が必要である。

注

本稿は、2013年3月21日に米国カリフォルニア州サンディエゴで開催された2013年度全米日本語教育学会春季大会[American Association of Teachers of Japanese(AATJ)2013 Annual Spring Conference]において口頭発表した内容に補筆、修正を加えたものである。本調査は、岸和田市出身でサンフランシスコ州立大学大学院に在籍していたAlisa Frances Mahoneyさんと現在も岸和田市在住のご両親・ご家族からの格段のご理解を賜り献身的なデータ収集協力によって可能になったものである。衷心より御礼申し上げる次第である。また、研究調査データ収集後の初期分析段階(2011年6月)では、陣内正敬先生に貴重な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。最後に、中泉方言話者であった亡父、南友雄、伯母、南悦子、筆者の従姉妹・従兄弟を始め、筆者が幼少から小学生・中学生の時代に岸和田ことば(中泉方言)を身近に観察する機会を与えてくださった当時の同級生、岸和田市でお世話になった方々にも感謝の意を付記して本稿を捧げたい。

参考文献

- Giles, H., Coupland, N., & Coupland, J. (1991). Accommodation theory: Communication, context, and consequence. In H. Giles, J. Coupland, & N. Coupland (Eds.), *Contexts of accommodation: Developments in applied sociolinguistics*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Giles, H., & Powesland, P. F. (1975). A social psychological model of speech diversity. In H. Giles & P. F. Powesland (Eds.), *Speech style and social evaluation (European monographs in social psychology)* (pp. 154-170). New York: Harcourt Brace.
- 朝日 祥之 (2004) 「ニュータウン・コイネの形成過程に見られる言語的特徴—動詞の否定辞を例として—」『日本語諸方言に見られる中間語的変異の研究—言語変異理論の立場から—』 科研費報告.
- 金沢 裕之 (1998) 『近代大阪語変遷の研究』(研究叢書 224) 和泉書院.
- 岸江 信介(2005)「近畿周辺圏にみられる打消表現」『日本語学』 pp. 32-43. 明治書院.
- 岸江 信介(2009)「大阪語とは何か」真田 信治(監修)岸江 信介・中井 精一・鳥谷 善史(編)『大阪のことば地図』(上方文庫別巻シリーズ2) pp. 8-16. 和泉書院.
- 岸江 信介・中井 精一(1994)『地域語資料1 京都～大阪間方言グロットグラム』近畿方言研究会.
- 国立国語研究所(編)(2003)『ことばの地域差—方言は今—』(新「ことば」シリーズ16) 財務省印刷局.
- 小林 隆(2006)『<もっと知りたい日本語>方言が明かす日本語の歴史』 岩波書店.
- 佐藤 虎男(1986)「大阪府方言の研究(9) 大阪市域方言の方言地理学的調査(3)」『学大図文』(29) pp. 1-16. 大阪学芸大学国語国文学研究室.
- 真田 信治(1987)「ことばの変化のダイナミズム—関西圏における neo-dialect について—」『言語生活』 通号 429, pp. 26-32. 筑摩書房.
- 真田 信治(1990)『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院.
- 真田 信治(2001)『方言は絶滅するのか 自分のことばを失った日本人』PHP 新書.
- 真田 信治(編)(2006)『社会言語学の展望』くろしお出版.
- 真田 信治・岸江 信介(1990)『大阪市方言の動向—大阪市方言の動態データ—』 科研報告書.
- 真田 信治(監修)岸江 信介・中井 精一・鳥谷 善史(編)(2009)『大阪のことば地図』(上方文庫別巻シリーズ2) 和泉書院.
- 徳川 宗賢・真田 信治(編)(1991)『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社.
- 西尾 純二(2009)『「堺・南大阪地域学」シリーズ12 関西・大阪・堺における地域言語生活』大阪公立大学共同出版会(OMUP).
- 橋内 武(1999)『ディスコース—談話の織りなす世界—』くろしお出版.
- 松本 直樹(2011)「泉北ニュータウンと隣接地域における方言使用の実態」『言語文化研究(言語情報編)』第6号, pp. 33-51. 大阪府立大学人間社会学部 言語文化学科.
- 南 雅彦(2009)『言語と文化: 言語学から読み解くことばのバリエーション』くろしお出版.
- 柳田 國男(1930)『蝸牛考』刀江書院.

付録

質問項目[オリジナルの調査での質問項目番号も記載]

1. 「来ない」(カ行変格活用)
「あの人はここには来ない」と言うとき、「来ない」の部分をどう言いますか。
[オリジナルの調査では質問項目46]
2. 「しない」(サ行変格活用・不規則動詞)
「今日は、もう仕事をしない」と言うとき、「しない」の部分をどう言いますか。
[オリジナルの調査では質問項目48]
3. 「出来ない」(上一段活用・母音動詞)
友達に「今日はクラブの練習をすることが出来ない」と言うとき、「出来ない」の部分をどう言いますか。[オリジナルの調査では質問項目10]
____できへん
____だけへん
____できひん
____他の言い方をする：_____
4. 「見ない」(上一段活用・母音動詞)
「今日はテレビは見ない」と言うとき、「見ない」の部分をどう言いますか。
[オリジナルの調査では質問項目47]
5. 「起きない」(上一段活用・母音動詞)
「毎日6時に起きるの?」と聞かれて「起きないよ」と言うとき、どう言いますか。
[オリジナルの調査では質問項目51]
____起きへん
____起きひん
____他の言い方をする：_____
6. 「行かない」(五段活用・子音動詞)
「今日は学校に行くか」と家の人から聞かれて、「行かないよ」と答えるとき、どう言いますか。[オリジナルの調査では質問項目44]
7. 「構わない」(五段活用・子音動詞)
「今日の約束が明日に延びても構わないよ」と言うとき、「構わないよ」の部分をどう言いますか。[オリジナルの調査では質問項目4]
____かまへん(よ)
____かまわへん(よ)
____かめへん(よ)
____他の言い方をする：_____
8. 「行かなかった」(五段活用・子音動詞 過去)
「昨日は、学校に行ったか」と家の人から聞かれて「行かなかったよ」と答えるとき、どう言いますか。[オリジナルの調査では質問項目45]
9. 「知らなかった」(五段活用・子音動詞 過去)
「それは知らなかった」と言うとき、「知らなかった」の部分をどう言いますか。
[オリジナルの調査では質問項目20]
____知らなんだ
____知らんかった
____知らへんかった
____他の言い方をする：_____